

アダム・スミスの自然価格論について(中)

——生産価格論の学史的考察——

岡 崎 栄 松

〔I〕はじめに

〔II〕 A・スミスの狭義の自然価格論

一 スミスの自然価格・市場価格論

二 投下労働説と支配労働説

三 分解価値説と構成価値説(以上、前号所載)

四 第一の「自然価格」概念の意味内容

〔III〕 A・スミスの広義の自然価格論

一 スミスの賃金・利潤論

二 第二の「自然価格」概念とその理論的意義(以上、本号所載)

三 スミス地代論(一)(以下、次号掲載予定)

四 スミス地代論(二)

〔IV〕 問題の総括

アダム・スミスの自然価格論について(中) (岡崎)

一九(六二)

〔Ⅱ〕 A・スミスの狭義の自然価格論（つづき）

四 第一の「自然価格」概念の意味内容

さて、これまでの二つの節でわれわれは、価値論および分配論におけるA・スミスの所説を検討してきたのだが、ここでわれわれは、前二節での検討をつうじて明らかにした諸点を要約しておくことにしよう。

まず、本章Ⅱの二「投下労働説と支配労働説」の要約。——(一)アダム・スミスは、生産者たちが相互に商品所有者としてのみ対応し合う「初期未開の社会状態」を想定しながら、こういう社会状態のもとでは「対象物を互いに交換するための規則」となりうるのは、ただ、「さまざまな対象物を獲得するために必要な労働量のあいだの割合」だけだとして、投下労働量による価値規定すなわち投下労働説を展開した。(二)スミスはまた、分業が確立されて「あらゆる人が交換によって生活する」ようになる「商業社会」——ここでも生産者たちは商品所有者としてのみ対応し合う——では、生産者の富は彼が支配しうる他人の労働の量に正確に比例する、という点を強調しながらも、そこでの商品の「実質価格」||「実質価値」を相変らず投下労働量によって規定していた。(三)しかし、「労働」と「労働の生産物」とをたえず等置するスミスは、「初期未開の社会状態」ないし「商業社会」では商品に投下された労働量と、その商品が支配し購買しうる労働量とが一致するという事情からして、ここでは支配労働量または「労働の価値」が投下労働量と同じように商品価値の内在的尺度になりうるとして支配労働説

を提唱した。(四)この場合には、スミスは、商品の「実質価値」を「特定の商品がそれを所有していた人に与えたであろう他の人々の労働にたいする支配力」、つまり支配労働量によって規定する。(五)しかもスミスは、内在的価値尺度と外在的価値尺度とを混同して「……それ自体の価値がたえず変動する商品もまた、他の諸商品の価値の正確な尺度にはなりえない」と考えたため、「それ自体の価値においてけつして変動しない労働」だけが価値の「究極かつ真の標準」であると主張した。(六)しかし、スミスが商品価値を支配労働量または「労働の価値」によって規定するときには、彼は、価値の説明にさいして価値そのものを前提するという論理矛盾に陥っており、もっとも現象的な意味での交換価値、すなわち単なる購買力としての交換価値を取り扱っているにすぎない。(七)アダム・スミスは、「労働の全生産物」が生産者自身に属する「事物の本源的な状態」が終りをつけると、商品に對象化された一定量の労働——つまり資本——が、その商品自身に含まれているよりも多くの量の生きた労働を支配するようになる、という点を正當に把握し、かつ、この点を強調した。(八)スミスがこのように、資本関係の「導入」後に生ずる本質的な変化を力説したことは彼の大きな功績であったといつてよい。(九)しかしスミスは、資本(對象化された労働)を生きた労働と直接に對置させたため、資本と賃労働との交換の問題を正しく解決することができず、かえつて「文明社会」あるいは資本主義社会での投下労働説の妥當性を否定するにいたつた。(十)A・スミスの所見では、「労働の価値」だけは「文明社会」にあつても——他の諸商品の価値がどのように変動しようとして——つねに不変のままであつて、そこで彼は、「労働の価値」または支配労働量による価値規定、すなわち支配労働説は資本関係の「導入」後もひきつづき妥當性を保持すると考えた。(十一)こうしてスミスは、「文明社会」資本主義社会においても支配労働量は商品価値の規制者であると同時に、「それによつていっさいの商品の価

値が評価され、また比較されるところの、究極かつ真の標準」だと主張した。

つづいて本章Ⅱの三「分解価値説と構成価値説」の要約。——(一)アダム・スミスは、実際上は資本関係の出現後の事態についても投下労働説を固持しながら、賃金、利潤および地代をいずれも付加価値の分解部分と見なし、分解価値説を展開した。(二)この場合にはスミスは、「深遠な考察方法」のもとに、「ブルジョア経済体制の隠れた構造」あるいは「ブルジョアの体制の内的関連」を探究・分析しているといつてよい。(三)しかしアダム・スミスは、生産物価値と価値生産物とを混同しながら、「どのような社会でも、あらゆる商品の価格は結局、これらの三部分(賃金・利潤・地代)のいずれか一つに、またはそのすべてに分解される」と述べて、いわゆる「 $v+m$ のドグマ」に陥った。(四)もっとも彼は、個別的資本の生産物についても社会的総生産物についても、ときとしてこのドグマを自分自身で否定し止揚したのではあるが。(五)支配労働説の見地に立つスミスは、賃金、利潤および地代をもって価値ないし交換価値の構成者と解しつつ、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」と主張して構成価値説を唱えた。(六)だが、——マルクスが指摘していたように——この場合にはスミスは賃労働、資本および土地所有を、「商品に対象化されている労働の一部分を取得するための権利名義(条件)」という意味での収入源泉から、近代的諸収入の「実体」つまり価値そのものを生み出す「三つの違った独立な源泉」に転化させている。(七)また、この場合にはスミスは、あらゆる労働はその本性上、いわば自然的に賃労働だとしながら、一定の歴史的に規定された生産諸要因(賃労働・資本・近代的土地所有)をあらゆる社会に共通な素材的生产諸要因(労働・生産手段・土地)に解消しており、かつ、こういうものとしての労働・生産手段・土地の生産的「役立ち」から生ずる賃金、利潤および地代が価値ないし交換価値を構成する、というふう

に誤認している。(V)だから、スミスが支配労働説の観点から構成価値説を述べるさいには、彼は「通俗的な考察方法」のもとに、事態を、それがブルジョアの生産当事者たちにたいして現われるがままに描いているとしなければならぬ。

さて、われわれは、前二節での検討によって明らかになった右の諸点をふまえて、こんどは、『国富論』第一篇第七章に説かれている(第一の)「自然価格」概念の理論的な意味内容を吟味してゆくことにしよう。

すでに本章〔Ⅱ〕の第一節で見ておいたように、アダム・スミスは、「自然価格」を規定して、「それ〔ある商品〕を産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない」価格だとしていた。彼はまた、「自然価格」とは「それ〔ある商品〕をそこ〔市場〕へもたらすために支払われなければならない地代、労働(＝賃金)および利潤の全価値」のことだと解していた。そして彼は、こういうものとしての「自然価格をよるこんで支払う人々の需要」が「有効需要」にはかならないとして、たとえば需給一致の場合について次のように述べていた。——「市場へもたらされる〔ある商品の〕量がちょうど有効需要を充足し、それ以上に出ない場合には、市場価格は自然に自然価格と正確に同じになるか、または判断しうるかぎりそれと近似的に同じになる」。

ところで、スミスが「自然価格」をもって「それ〔ある商品〕をそこ〔市場〕へもたらすために支払われなければならない地代、労働および利潤の全価値」だとするさいには、一見したところ、彼は、投下労働量あるいは労働時間によって規定された価値を「自然価格」と同一視しているかに思われる。だが、そうではなく、スミスはここでは、「支払われなければならない」地代の「価値」、賃金の「価値」および利潤の「価値」によって「自然

「価格」を構成しているのであり、そのさい、当然のことながら、投下労働量による価値規定はすっかり放棄されているのである。いかえれば、ここでは彼は、これらの収入の「価値」をいずれも支配労働量によって規定しているのであつて、この点は、たとえば、彼が第六章「諸商品の価格の構成部分について」のなかで次のようにいつていることから知られるであらう。——「注意されなければならないのは、価格のありとあらゆる構成部分の實質価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測定されるということである。労働は、価格のうちで、労働(＝賃金)に分解される部分の価値を測定するばかりではなく、地代に分解される部分の価値と、利潤に分解される部分の価値をも測定するのである」(*The Wealth of Nations*, p. 52. 前掲訳書、一三五頁、傍点は引用者、——△引用H▽)。

すでに見ておいたように、支配労働説の立場に立つスミスは、内在的価値尺度と外在的価値尺度とを混同して、「それ自体の価値においてけつして変動しない労働だけが、いつどのようなところでも、それによっていっさいの商品の価値が評価され、また比較されうるところの、究極かつ真の標準である」とする。スミスのこういう見解は、彼が右の△引用H▽でのように主張するときにも、もちろん保持されているのであつて、だからまた、△引用H▽の第二センテンスのはじめに出てくる「労働」という言葉は投下労働を指しているのではなく、「購買または支配しうる労働」を意味しているわけである。したがつて、△引用H▽でスミスがいつているのは、「価格のありとあらゆる構成部分」——賃金、地代および利潤——の「實質価値」は「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量」によって規定されるということである。

もっとも、スミス自身はここでは「測定する」という言葉を使っているが、しかし本章[II]の第二節で詳論した

ように、支配労働説の見地に立つスミスにあっては、「それ自体の価値においてけっして変動しない労働」たる支配労働が内在的価値尺度と外在的価値尺度との双方の役割を担わされているのだから、右の△引用H▽で賃金・利潤および地代の「実質価値」の測定者とされている「購買または支配しうる労働の量」は、同時にそれらの収入の「実質価値」の規定者でもあるとされているわけである。またスミスは、あまり長くもない△引用H▽のなかで、「分解される」という表現を三度も使っているが、しかし、それだからといって、ここで彼が分解価値説を展開しているということにはならない。ここでは、たとえば、彼が賃金と労働そのものを無造作に同一視して「労働に分解される部分の価値」ということからも知られるように、彼スミスは、あらゆる労働はその本性上、自然的に賃労働だと解しながら、なんらの形態規定ももたない素材的生産要因たる労働・土地・生産手段が生産過程で果たす役割から賃金の「価値」、地代の「価値」および利潤の「価値」が発生し、かつ、これらの三者が商品の「価格」を構成する、というふうを考えているのである。

そしてスミスが、「自然価格」をもって「それ〔ある商品〕をそこ〔市場〕へもたらすために支払われなければならない地代、労働および利潤の全価値」だとする場合にも、彼は同じように思惟しているといつてよい。すなわち、この場合にもスミスは、△引用H▽におけると同様、投下労働説および分解価値説をすでに放棄して、地代の「価値」、賃金の「価値」および利潤の「価値」——これらは「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量」によって「測定」——規定される——の三者が商品の「自然価格」を構成する、と考えているわけである。だからマルクスは、『国富論』第一篇第七章の自然価格・市場価格論について次のように述べている。——「スミスは、はじめに、交換価値は労働量に帰着するということ、また交換価値に含まれている価値は、原料などを

控除したあととは、労働者に支払われる労働部分と労働者に支払われない労働部分とに分解し、このあとのほうの部分は利潤と地代とに(この利潤はさらにおそらく利潤と利子とに)分解するということを説明したのちに、にわか主張を変える。そして交換価値を、賃金と利潤と地代とに分解させるのではなく、むしろこれらを交換価値の形成者にし、それらが独立の交換価値として生産物の交換価値を形成するのだとして、商品の交換価値を、独立の、それにはかかわりなく規定された賃金と利潤と地代との価値によって構成する。価値がこれらのものの源泉なのではなく、これらのものが価値の源泉になるのである。……/彼(スミス)が内的関連を述べたあとで、突如ふたたび彼を支配しているのは、現象の観点であり、競争のうちに現われるとおりの事物の関連である。そして競争においては、すべてがつねに転倒して現われ、いつもさかだちしているのである。/ところで、スミスが『諸商品の自然価格』とそれらの『市場価格』との相違を述べているのは、このあとのほうの転倒した出発点からである』(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, SS. 214-215. 『学説史』第二分冊、『全集』②、二八〇—二八一頁、傍点はマルクス、ゴシックは引用者)。

すなわち、アダム・スミスが「自然価格」を規定して、「それ(ある商品)をそこ(市場)へもたらすために支払われなければならない地代、労働および利潤の全価値」だとする場合には、彼は地代の「価値」、賃金の「価値」および利潤の「価値」をいずれも支配労働量によって規定しながら、これら三者によって商品の「自然価格」が構成されるとしているわけである。この意味において、『国富論』第一篇第七章の自然価格・市場価格論は支配労働説および構成価値説に基づく所論といつてよく、あるいはむしろ構成価値説そのものだというべきであろう。そして、マルクスも指摘しているように、この場合にはスミスは労働時間による価値規定をすでに捨てていて、

もっぱら「現象の観点」から、「競争のうちに見られるとおりの事物の関連」を記述しているのである。(注)

(注) この点を指摘してマルクスはこうも書いている。「……A・スマスは、商品の自然価格すなわち費用価格を商品の価値と同一視しているが、このことは、彼が価値についての自分の正しい見解をあらかじめ放棄して、競争の諸現象から浮かんでくるがままの見解を、それと取り替えてしまったあとに起こったことである。競争においては、価値ではなく費用価格が市場価格の規制者として、いわば内在的価格として——商品の価値として——現われる。ところが競争においては、この費用価格そのものが、賃金、利潤および地代の与えられた平均率によって再び与えられるように見えるのである。したがって、スマスは、これらの平均率を独立に、商品の価値にはかわりなく、むしろ自然価格の要素として確立しようとするのである」(Ehrenda, SS. 233-234. 同上、三〇九頁、傍点はマルクス)。

けれども、ここでわれわれは、スマスが「自然価格」の構成者としての賃金・利潤・地代の「価値」について語るとき彼が実際に念頭に置いているのは、労働者、資本家および地主に「支払われなければならない」貨幣額つまり価格、だという点に注意しなければならない。この点は、たとえば、スマスが第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」のなかで、市場価格の変動が賃金、利潤、地代におよぼす影響を問題にしながら、次のようにいっていることから明らかであろう。

「ある商品の市場価格の随時的で一時的な波動は、その価格のなかで、賃金と利潤とに分解される部分に主として影響をおよぼす。地代に分解される価格部分がこれらの波動から影響を受けることは前者よりも少ない。貨幣で確定されている地代は、その率でもその価値でも、それらの波動からまったく影響を受けない。地代が粗生産物の一定割合か一定量かのいずれかである場合には、その年価値が粗生産物の市場価格の随時的で一時的な波動のすべてから影響を受けることは、疑いなくいけれども、その年率が影響を受けることはめったにな

い。借地契約の条件をとり決めるにさいしては、地主も農業者も、その最善の判断にしたがい、かの率を生産物の一時的で随時的な価格ではなく、その平均的で通常のな価格に適合させようと努力するのである」(*The Wealth of Nations*, p. 61. 前掲訳書、一四九頁、傍点は引用者)。

ここでもスミスは「分解される」という表現を二度使っているが、これは——彼の場合、よくあることだが——いわば単なる言葉上のことであって、むしろ、ここでは彼は構成価値説の見地に立っている。それはそれとして、ここでスミスが、「ある商品の市場価格の随時的で一時的な波動」が「その価格のなかで、賃金と利潤とに分解される部分」(すなわち、賃金の「価値」および利潤の「価値」と「地代に分解される価格部分」(つまり地代の「価値」)とおよぼす影響を考察しながら、「市場価格の随時的で一時的な波動」は賃金の「価値」と利潤の「価値」に「主として影響をおよぼす」とか、「地代が粗生産物の一定割合か一定量かのいずれかである場合には、それ〔地代〕の年価値が粗生産物の市場価格の随時的で一時的な波動のすべてから影響を受ける」とか主張するとき、「価値」という言葉で実際に含意されているのが、支払われるべき一定額の貨幣または価格であることは明白であろう。つまり、スミスが「自然価格」の構成者としての賃金・利潤・地代の「価値」を問題にするさいには、語の厳密な意味での価値概念は消え去っているわけである。

『資本論』第三卷(第七篇第五十章「競争の外観」)においてマルクスは、上述のような「自然価格」概念を説くA・スミスとその支持者たちを念頭に思い浮かべて次のように述べている。「……ここ〔構成価値説あるいは自然価格論〕では、いっさいの価値概念がなくなってしまう、ということも明らかである。残るものは、ただ、いくらかの貨幣量が労働力や資本や土地の所有者たちに支払われるという意味での、価格の観念だけである。だが、貨幣と

はなにか？ 貨幣は物ではなく、価値の一定の形態であり、したがってやはり価値を前提している。そこで、われわれがいたいのは、一定量の金銀がこれらの生産要素に支払われるということ、または、これらの生産要素が頭のなかでこの金銀量に等置されるということである。ところが、金銀は（そして啓蒙された経済学者はこの認識を誇る）他のすべての商品と同じにそれ自身、商品である。だから、金銀の価格もまた労賃、利潤、地代によって規定されている。だからわれわれは、労賃、利潤、地代を、それらがいくらかの量の金銀に等置されるということによって規定することはできないのである。なぜならば、この三つのものの等価としてこの三つのものの評価の基準となるべきこの金銀の価値こそ、まさにこの三つのものによって、金銀にはかわりなしに、すなわち、まさにかの三つのものの産物にはかならないどの商品の価値にもかかわりなしに、まず第一に規定されるべきだからである。したがって、労賃、利潤および地代の価値は、それらがいくらかの量の金銀に等しいということである、と語るのは、ただ、労賃、利潤および地代はいくらかの量の労賃、利潤および地代に等しいと語ることではないであらう」(Das Kapital, Bd. III, MEW, Bd. 25, SS. 870-871. 『資本論』第三卷『全集』⑧b、一一〇三—一一〇四頁、傍点は引用者)。

要するに、スミスが賃金の「価値」、利潤の「価値」および地代の「価値」によって「自然価格」を構成する場合には、彼は「いっさいの価値概念」を放棄して、賃金、利潤および地代をたんに自然的生産要因——労働・「資財」・土地——の価格と見なしているのであり、そしてこの場合には彼は、「労賃、利潤および地代はいくらかの量の労賃、利潤および地代に等しい」とする論理矛盾あるいは堂々めぐりに陥っているのである。さきにマルクスが、『国富論』第一篇第七章の自然価格・市場価格論を評して、「ここで」彼を支配しているのは、現

象の観点であり、競争のうち、現われると、おりの、事物の、関連である」(傍点はマルクス)と述べたゆえんである。

しかし、ここでわれわれは、アダム・スミスの(第一の)「自然価格」概念の意味するところをいまま少し立ち入って見ておこう。

第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」のなかでスミスは次のように論じている(一部既出)。

「ある商品の価格が、それを産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない場合、このときその商品は、その自然価格と呼んでもさしつかえないもので売られるのである。

「この場合、その商品は正確に、それが値いするだけに、すなわち、その商品を市場へもたらす人にそれが、実際に費やさせただけに、売られるのであって、それというのも、たとえ日常用語でいう商品原価(the prime cost of any commodity)には、その商品をふたたび売るべき人の利潤は含まれないにしても、もし彼が自分の近隣における通常率の利潤も見込めぬほどの価格でそれを売れば、彼がこの取引で損失者になるのは明白だからであり、そのわけは、もし彼がその資財をある他の方面に使用しさえすれば、それだけの利潤はあげえたかも知れないからである」(The Wealth of Nations, p. 57. 前掲訳書、一四三—一四四頁、傍点は引用者、——引用者I)。

スミスはまた、「市場へもたらされるある商品の量」が「有効需要」を超過した場合を想定しながら、次のようにいう(既出)。

「もしある場合にこの量が有効需要を超過すれば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以下で支払わ

れるにちがいない。もしそれが地代なら、地主たちの利害関係が彼らを刺激し、即刻にもその土地の一部を引き上げさせるであろうし、またもしそれが賃金または利潤なら、前者の場合には労働者の利害関係が、また後者の場合にはその雇い主の利害関係が、彼らを刺激し、即刻にも彼らの労働なり資財なりの一部をこういう仕事から引き上げさせるであろう。市場へもたらされる量は、間もなくちょうど有効需要を充足するに足りるだけのものになるであろう。その価格のさまざまな構成部分のすべては、その自然率にまで上昇し、また全価格もその自然価格にまで上昇するであろう（——引用J↓）。

右の△引用I▽および△引用J▽では、スマスは完全な自由競争を前提しながら、生産当事者たちの観点から含まれないが、しかし彼の商品の販売価格は「自分の近隣における通常率の利潤」をもたらずでなければならぬ、なぜなら、もしそうでなければ彼が「この取引で損失者になるのは明白だから」である、同様に、彼の商品の販売価格は「土地の地代」および「労働の賃金」を「それらの自然率にしたがって支払うのに十分」でなければならぬ、というのは、もし地代が「自然率以下で支払われる」ならば、「地主たちの利害関係が彼らを刺激し、即刻にもその土地の一部を引き上げさせるであろう」し、また賃金が「自然率以下で支払われる」ならば、やはり「労働者の利害関係が……彼らを刺激し、即刻にも彼らの労働……の一部をこういう仕事から引き上げさせる」だろうからである、こうして商品の販売価格≡市場価格はたえず「自然価格」にひき寄せられるが、この「自然価格」は「自然率」（≡「通常率あるいは平均率」）の賃金、利潤および地代の合計、つまり△平均賃金+平均利潤+平均地代▽である、と。そしてスマスは、ある商品がこのような「自然価格」で売られるとき、その商

品は「正確に、それが値いするだけに」売られるとするのである。

このようにスマスは、ある商品の「自然価格」は「それ〔その商品〕が値いするだけ」のもの、つまり「価値」だと説くのだが、しかし、だからといって、彼は「自然価格」を労働時間によって規定された価値に等置しているわけではない。この点は、右の△引用ⅠⅤにおいて彼が、「この場合、その商品は正確に、それが値いするだけに、すなわち、その商品を市場へもたらす人にそれが実際に費やさせただけに、売られる」云々と述べて、「価値」と費用とを同一視していることから明らかであろう。つまり、△引用ⅠⅤでもスマスは、労働時間による価値規定をすでに放棄して、**「自然率」にしたがって支払われるべき、「土地の地代」・「労働の賃金」・「資財の利潤」**をもって「自然価格」および「価値」そのものの構成者だと解しているわけである。

マルクスは『剰余価値学説史』(第二分冊)のなかで、この間の事情を説明しながら、前掲△引用ⅠⅤの文章について次のように論述している。——「ここには自然価格の全成立史が、しかもそのうえ、まったくそれにふさわしい言葉と論理とをもって述べられている。というのは、商品の価値は賃金、利潤および地代の価格によって形成されるのであり、しかもさらに、これらのあとのほうのものの**真実の価値が形成されるのは、それらが自然率にある場合なのであって、したがって明らかに、商品の価値はその費用価格と同じものであり、この費用価格は商品の自然価格と同じものだからである。利潤の割合すなわち利潤率は、また賃金率も、与えられたものとして前提される。つまり、それらは、費用価格の形成にとってそうなのである。それらは費用価格にとっては前提されているのである。したがって、それらは、個々の資本家にもまた与えられたものとして現われる。どのようにして、どこで、なぜ、ということ**は個々の資本家のかかわることではない。スマスはここでは、自分の商品の

費用価格を決定する個々の資本家の、資本主義的生産の当事者の立場に立っている。つまり、労賃などはいくらいくら、一般的利潤率はいくらいくらになるというふうになる。それだから、このようなことが、この資本家にとって、商品の費用価格の、または、さらに彼にとっては商品の価値として現われるもの、確立される手続きであるように思われるのである。というのは、資本家もまた、市場価格があるときはこの費用価格よりも高く、あるときはそれよりも低いことを知っており、したがって彼にとってはこの費用価格が、商品の理想的価格、商品の価格変動とは区別されるその絶対的価格として、つまりその価値として現われるからである。といっても、それは、彼が一般にこうしたことについて考える時間をもつかぎりでのことであるが。そしてスミスは競争のまっただなかに身を移すのだから、彼もまたすぐに、この範囲にとられた資本家たちの特有な論理をもってあれこれと理屈をこねるのである」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, SS. 216-217. 『学説史』第二分冊『全集』②⑥Ⅱ、二八三—二八四頁、傍点はマルクス)。

ここでマルクスが指摘しているように、『国富論』第一篇第七章でA・スミスがその自然価格・市場価格論を述べるさいには、彼は「自分の商品の費用価格を決定する個々の資本家」あるいは「資本主義的生産の当事者」の立場に立っていて、賃金、利潤および地代の「自然率」をいづれも所与のものとして前提しつつ、これらの「自然率」によってそれぞれ独立に定まる平均賃金・平均利潤・平均地代をもって商品の「費用価格(Kostenpreis)」Ⅱ「自然価格」の構成者だとするのである。その場合、「どのようにして、どこで、なぜ、ということ」は、生産当事者たちにとつと同様、「競争のまっただなか」に身を置いているスミスにとつても理論的関心の対象とはならない。そして、スミスが一商品の「自然価格」は「それが値いするだけ」のものだと主張するときには、

アダム・スミスの自然価格論について(中) (岡崎)

彼は競争場裡の個別資本家たちと同じく、商品の「中心価格」としての「自然価格」(=平均賃金+平均利潤+平均地代)をその「理想的価格(der ideale Preis)」または「絶対的価格(der absolute Preis)」と見なして、これを「価値」そのものだとしているのである。^(注)

(注) 『資本論』第三卷(第七篇第五十章「競争の外観」)においてマルクスは、「自分の商品の費用価格を決定する個々の資本家」にとっては——だからまた、通俗的見地に立つスミスにとっても——賃金、利潤および地代がいずれも「自然価格」または「価値」そのものの形成者として現われざるをえないその客観的根拠を指摘しながら、次のように述べている。かなり長文にわたるが極めて重要なので、煩をいとわず引用しておこう。

「……労賃は、それに対応する価値等価が生産されるより前に、契約によって定められる。それゆえ、商品と商品価値が生産される前からその大きさが与えられている一つの価格要素として、つまり費用価格の成分として、労賃は、独立な形で商品の総価値から分かれる一つの部分としては現われなくて、逆に、この総価値を前もって規定する与えられた大きさとして、すなわち価格または価値の形成者として現われるのである。労賃が商品の費用価格のなかで演ずるのと同様な役割を、平均利潤は商品の生産価格のなかで演ずる。なぜなら生産価格は、費用価格・プラス・前賃資本にたいする平均利潤、に等しいからである。この平均利潤は実際上では、つまり資本家自身の観念や計算では、一つの調節的要素としてはいってくる。すなわち、それが一つの投下部面から別の投下部面への諸資本の移転を規定するかぎりではいってくるだけでなく、いくらか長い期間にわたる再生産過程を包括するようなすべての販売や契約にかんじてはいってくるのである。しかし、平均利潤がこのようにしてはいってくるかぎりでは、それは、一つの前提された大きさであって、この量は、実際、それぞれの個別生産部面で生み出された価値や剰余価値からは独立なものであり、したがってまた、これらの部面のそれぞれで各個の投資が生み出した価値や剰余価値からはなおさら独立なものである。現象は平均利潤を価値の分裂の結果としては示さないで、むしろ、商品生産物の価値からは独立な、諸商品の生産過程ではじめから与えられている、そして、諸商品の平均価格そのものを規定する大きさとして、すなわち価値形成者として示すのである。しかも、剰余価値は、そのいろいろな部分がまったく互いに独立な諸形態に分解

するので、もつとずつと具体的な諸形態で諸商品の価値形成に前提されているものとして現われる。平均利潤の一部は、利子という形で、独立に、商品とその価値の生産に前提されている、要素として、機能資本家に相對する。利子の大きさは變動するとはいへ、利子は、それぞれの瞬間には、またそれぞれの資本家にとっては、一つの与えられた大きさであつて、それが個々の資本家にとっては自分の生産する商品の費用価格にはいるのである。農業資本家にとっては契約で定められた借地料という形で、地代がやはりそうであり、また他の企業家たちにとっては營業場所の賃借料の形で、地代がそうである。これらの部分は、剰余価値が分解したものであるのに、個別資本家にとっては費用価格の諸要素として与えられているので、逆に剰余価値の形成者として、すなわち労賃が商品価格中の別の部分を形成するように商品価格中の一部分を形成するものとして、現われるのである」(Das Kapital, Bd. III, MEW, Bd. 25, SS. 878-879. 『資本論』第三卷、『全集』②a, 一一三—一一四頁、傍点は引用者)。

さらにマルクスは、生産当事者たちのこうした觀念が固定化されるのはなぜか、また彼らにとつては「自然価格」(=平均賃金+平均利潤+平均地代)が市場価格の変動の重心点として意識されるのはなぜか、などの点を問題にして、ひきつづき次のようにいっている。

「このような、商品価値の分解の産物が、なぜ価値形成そのものの前提として現われるのか、という秘密は、ただ単に次のようなことなのである。すなわち、資本主義的生産様式は、他のどの生産様式とも同様に、たえず物質的産物を再生産するだけではなく、社会的・経済的諸関係を、この生産物形成の経済的形態規定を、再生産するということである。それだから、この生産様式の結果はたえずその前提として現われるのであつて、ちょうどその諸前提がその諸結果として現われるのと同様である。そしてこのような、同じ諸関係の不断的再生産こそは、個々の資本家が自明のこととして、疑いない事実として予想するものなのである。資本主義的生産そのものが存続するかぎり、新たに付加される労働の一部分はたえず労賃に分解し、もう一つの部分は利潤(利子と企業者利得)に、そして第三の部分は地代に分解する。いろいろな生産要因の所有者たちのあいだの契約では、このことが前提されているのであつて、この前提は、これらの相対的な量的関係が各個の場合にどのように變動しようとも、正しいのである。いろいろな価値部分がそれぞれ一定の姿で相對するということが前提されているのは、その姿がたえず再生産されるからであ

り、また、それがたえず再生産されるのは、それがたえず前提されているからである。

「ところで、これもまた確かに経験や現象が示していることであるが、資本家にとって、は実際に価値規定がただその影響のもとでのみ現われるところの市場価格は、その大きさから見れば、けっしてこのような予想によって定まるのではないのであり、また、利子や地代が高く約定されたか低く約定されたかによって定まるものでもないのである。しかし、市場価格はただ変動をつうじてのみ不変なのであり、いくら長い期間のその平均こそは、労賃、利潤および地代のそれぞれの平均を不変な大きさとして、つまり、市場価格を究極的に支配する大きさとして生み出すのである。」(Ehenda, S. 879. 同上、一一四—一一五頁、傍点は引用者。)

さて、前節で見たように、アダム・スミスがその分解価値説を展開するさいには、彼は、いわゆる「 $r+m$ のドグマ」をときとして自分自身で止揚して、商品価値における「第四の部分」 $||c$ 部分の存在を——個別的資本の生産物についても社会的総資本の生産物についても——認めたのであった。けれどもスミスが、「自然価格」とは「土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない」価格だとして、みずからの自然価格・市場価格論を説く場合には、彼は「第四の部分」をいわば首尾一貫的に見逃すことになる。この点を指摘してマルクスは、われわれがさきに掲げた Δ 引用I ∇ にかんして次のように述べている。——「ここではまた次のこともわかる。すなわち、なぜスミスが——この点について内心では大いにためらっているにもかかわらず——商品の価値をただ地代と利潤と賃金とだけに分解し、すべての『個々の』資本家の場合には当然、不変資本を認めているにもかかわらず、(かの Δ 引用I ∇ では)それを落としているのか、ということである。というのは、もし彼がそれを落としていなかったとすれば、次のようにいうはずだからである。すなわち、商品の価値は、賃金、利潤、地代および商品の価値のうち賃金や利潤や地代から成っていない

い部分から、成っている。と。このようにして、価値を賃金、利潤および地代にはかかわりなく確定することが必要になるであろう」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 217. 『学説史』第二分冊、『全集』②Ⅱ、二八四頁)。

ここでマルクスが、「なぜスミスが……すべての『個々の』資本家の場合には当然、不変資本を認めているにもかかわらず」というさいには、彼マルクスは、われわれが前節で問題にした、例の「第四の部分」にかんするスミスの所論(本誌前号、四三―四四頁参照)を念頭に置いていられるものと考えられる。それはともかく、たとえば引用ⅠVでのように、スミスが賃金、利潤および地代の「自然率」をいずれも所与のものとして前提しながら、これらの「自然率」によってそれぞれ独立に定まる平均賃金、平均利潤および平均地代をもって「自然価格」の構成者だとする場合には、「商品の価値のうち賃金や利潤や地代から成っていない部分」は見逃されているし、また見逃されざるをえないのである。^(注) というのは、もしそのような価値部分の存在を認めるならば、「価値を賃金、利潤および地代にはかかわりなく確定すること」が必要になり、こうして、 Δ 平均賃金+平均利潤+平均地代 Δ をもって「自然価格」ないし「価値」だとするスミス自然価格論そのものが否定されることになるからである。つまり、A・スミスの第一の「自然価格」概念は、いわばその本性上、商品価値における「第四の部分」の存在を認めることと相容れないわけである。

(注) 『資本論』第三卷(第七篇第五十章)には、この点にかかわる次のような指摘がある。

「……経験が彼〔資本家〕に示しているのは、彼自身が生産する生産物は不変資本部分として他の生産部面にはいつてゆき、またこれらの他の生産部面の生産物は不変資本部分として彼の生産物にはいつてくるということである。

アダム・スミスの自然価格論について(中)(岡崎)

つまり、彼にとつては、彼の新たな生産がおこなわれるかぎり、価値追加分は外観上は労賃、利潤、地代の大ききによつて形成されるのだから、このことは、他の資本家たちの生産物から成っている不変部分にも当てはまるのであり、したがつて結局、たとえ十分には説明のできない仕方によつてであろうとも、不変資本部分の価格も、したがつてまた諸商品の総価値も、結局は、それぞれ独立して別々の法則によつて規制され別々の源泉から形成される価値形成要素としての労賃、利潤、地代の合計から生ずる価値総額に帰着するのである」(*Das Kapital*, Bd. III, MEW, Bd. 25, S. 880. 『資本論』第三卷『全集』②b, 一一一五—一一一六頁、傍点は引用者)。

したがつて、『国富論』第一篇第七章におけるアダム・スミスの「自然価格」概念はその本性上、「商品の価値のうち賃金や利潤や地代から成つていない部分」つまり「第四の部分」を排除するものだとつてよい。これまでわれわれが、A・スミスの(第一の)「自然価格」概念の含意を示す場合に、 \wedge 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee が「自然価格」だとつて、これに「第四の部分」を含ませなかつたのは、このためである。そして、繰り返していえば、スミスの自然価格論——賃金、利潤および地代を「それぞれ独立して別々の法則によつて規制され別々の源泉から形成される価値形成要素」と見なすスミス自然価格論にあつては、いやおうなしに「第四の部分」が脱落せざるをえないのである。

さて、約言すれば、スミスが \wedge 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee をもつて「自然価格」だとする場合には、彼は、賃金・利潤・地代の「自然率」をいづれも所与のものと同前提しながら、これらの「自然率」によつてそれぞれ別個に定まる平均賃金・平均利潤・平均地代が「自然価格」および「価値」そのものを構成すると解しているわけである。この場合、彼が語の厳密な意味での価値概念を放棄して支配労働説および構成価値説の見地に立つており、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」と考えていることは、

あらためていうまでもなからう。そして、右のような第一の「自然価格」概念を説くスミスが、「自分の商品の費用価格を決定する個々の資本家」の立場から、「競争のうちに現われるとおりの事物の関連」を記述するにとどまっていることは、マルクスが強調していたところである。したがって、われわれはいまや次のようにいうことができよう。——アダム・スミスの第一の「自然価格」概念は、競争場裡の個別資本家の立場から見た「費用価格」であり、そのかぎりでは、それは通俗的・外面的な費用概念にほかならない、と。

〔Ⅲ〕 A・スミスの広義の自然価格論

一 スミスの賃金・利潤論

以上、われわれは、『国富論』第一篇第七章に説かれている自然価格・市場価格論——狭義の自然価格論——を、そこに提示されている第一の「自然価格」概念の検討に重点を置いて見てきたが、ここでわれわれは、これまでの考察をつうじてA・スミスの狭義の自然価格論について明らかにした諸点を概括しておくことにしよう。まず、アダム・スミスの自然価格・市場価格論の内容について（前章Ⅱの第一節の要約）。——(一) A・スミスのいう「自然価格」は、「それ〔ある商品〕を産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない」価格であり、簡単にいえば、 \wedge 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee を意味している。(二)この場合、スミスは、「事物がその

自然の運行にしたがうように放任され」て自由競争が完全におこなわれるような社会状態を前提している。(三)アダム・スミスは、「商品の自然価格をよるこんで支払う人々の需要」をもって「有効需要」と規定するとともに、供給側についても、「商品を市場へもたらす」のに「十分」な価格は「自然価格」(Ⅱ平均賃金+平均利潤+平均地代)だとしていた。(四)そして彼は、「市場へもたらされる商品の量」が「有効需要」を下回るか、上回るか、ちょうどそれと一致するかに応じて、市場価格は「自然価格」以上になったり以下になったり、またそれと正確に一致したりするのだと考える。(五)しかも、スミスの所見によれば、自由競争のもとでは「市場へもたらされるあらゆる商品の量は、自然に有効需要に適合する」ので、「自然価格」は「いっさいの商品の価格がたえずそれにひきつけられている中心価格」だということができる。(六)もっともスミスは、「ときには特定の偶然事が、またときには自然的諸原因が、さらには行政上の特定の諸法規が、多くの商品の市場価格を長期間にわたってその自然価格よりずっと高いままにしておくことがある」として、諸商品の市場価格を恒常的にそれらの「自然価格」から乖離させるいろいろな事情を問題にするが、しかし彼は、「ある商品の市場価格が、たとえ長く自然価格を上回ることがあっても、「完全な自由」がおこなわれるかぎり」ひきつづき長くそれを下回ることがめったにありえない」と考へる。

つぎに、A・スミスの第一の「自然価格」の意味内容について(前章Ⅱの第四節の要約)。——(一)アダム・スミスが「自然価格」をもって「それ(ある商品)をそこ(市場)へもたらすために支払われなければならない地代、労働(Ⅱ賃金)および利潤の全価値」だとするさいには、彼はすでに投下労働説すなわち労働時間による価値規定を放棄しており、これらの収入の「価値」をいずれも支配労働量によって規定している。(二)この場合には、スミ

スは地代の「価値」、賃金の「価値」および利潤の「価値」——これらは「そのおのおのが購買または支配する労働の量」によって「測定」ないし規定される——の三者が「自然価格」を構成する、と考えている。(三) A・スミスが「自然価格」の構成者としての賃金・利潤・地代の「価値」について語るさい彼が実際に表象に浮かべているのは、労働者、資本家および地主に「支払われなければならない」貨幣額つまり価格にほかならない。(四) この場合には、しかしスミスは、マルクスのいうように「いっさいの価値概念」を放棄して、「労賃、利潤および地代はいくらかの量の労賃、利潤および地代に等しい」とする悪循環に陥っているといわねばならない。(五) アダム・スミスが、ある商品の「自然価格」は「それ(その商品)が値いするだけ」のもの、つまり「価値」だと主張するときにも、この「価値」は実際には、支配労働量によって規定された「価値」にほかならない。(六) この場合、彼が眼中に置いているのは、「その商品を市場へもたらす人にそれが実際に費やさせただけ」のもの、すなわち費用であって、彼はこのような費用視点から、「自然率」にしたがって支払われるべき「土地の地代」・「労働の賃金」・「資財の利潤」をもって「自然価格」および「価値」そのものの構成者だとしているにすぎない。(七) A・スミスが賃金、利潤および地代の「自然率」をいずれも所与のものと同前提しながら、これらの「自然率」によってそれぞれ独立に定まる平均賃金、平均利潤および平均地代が「自然価格」を構成すると説くさいには、かの「第四の部分」が、いやおうなしに見逃されることになる、いいかえれば、A・スミスの第一の「自然価格」概念はその性質上、「第四の部分」を排除する。(八) アダム・スミスが \wedge 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee をもって「自然価格」と見なす場合には、彼は支配労働説および構成価値説の観点から、「競争のうちに現われるとおりの事物の関連」を取り扱っているにすぎず、そしてそのかぎり、A・スミスの第一の「自然価格」概念は、

競争場裡の個別資本家の立場から見た通俗的・外面的な費用概念だとしなければならぬ。

さて、アダム・スミスは『国富論』第一篇第七章において、われわれがこれまでに見てきたような自然価格・市場価格論(狭義の自然価格論)を展開したのちに、同章の末尾で次のようにいう。——「自然価格そのものは、賃金、利潤および地代というその構成部分のおおのの自然率とともに変動し、また、あらゆる社会ではこの率はその諸事情、すなわちその貧富、その進歩、停滞または衰退の状態にしたがって変動する。私は後続の四章で、できるかぎり余すところなく明瞭に、それらのさまざまな変動の諸原因を説明しようと努力するつもりである」(*The Wealth of Nations*, p. 65. 前掲訳書、一五五頁)。

こうしてスミスは、第八章以下の四つの章で賃金論、利潤論および地代論を広義の自然価格論として詳しく論述するのだが、われわれは本節では、第八章と第十章に説かれている賃金・利潤論を、われわれの主題の検討に必要なかぎりで見えやすくしておくことにしよう。

ところでスミスは、右の文章につづけて、第八と第十章における彼自身の課題を次のように設定している。すなわち、まず第八章「労働の賃金について」——「(ここでは)私は、賃金率を自然に決定する諸事情とはどのようなものであるか、またその諸事情は社会の貧富、進歩、停滞または衰退の状態からどういふふうに影響されるか、ということの説明しようと努力するつもりである」(*Ibid.*, p. 65. 同上、一五五頁)。つづいて第九章「資財の利潤について」——「(ここでは)私は、利潤率を自然に決定する諸事情とはどのようなものであるか、またその諸事情は、社会状態の右と同じようなものの変動からどういふふうに影響されるか、ということを明らかにしようと努力するつもりである」(*Ibid.*, p. 65. 同上、一五五頁)。さらに第十章「労働と資財のさまざまな用途に

おける賃金と利潤について——「たとえ金銭的な賃金や利潤 (pecuniary wages and profit) は、労働と資財のさまざまな用途において非常にまちまちであるにしても、なお労働のさまざまな用途のすべてをつうじる金銭的賃金のあいだにも、また資財のさまざまな用途をつうじる金銭的利潤のあいだにも、ふつうには一定の割合が生ずるように思われる。……〔第十章では〕私は、この割合を規制するさまざまな事情のすべてを説明しようと努力するつもりである」(Ibid., p. 65. 同上、一五五頁)。

要するに、「自然価格」の第一・第二の構成要素たる賃金および利潤の「自然率」を「自然に決定する諸事情」を明らかにすること——これが、第八、第十章におけるスミス自身の主題をなすわけである。

しかしながら、これらの章ではアダム・スミスは、——以前にわれわれがスミス分解価値説の基本的命題の一つとして考察したA引用Dの文章(本誌前号、三九—四〇頁参照)を含む第八章冒頭の部分は別として——概していえば支配労働説および構成価値説の見地に立っており、主として「現象の観点」から、「競争のうちに現われる」とおりの事物の「関連」を取り扱っているといつてよい。だからマルクスは、『剰余価値学説史』(第一分冊)のなかで、これらの章を評して次のように述べている。「……労賃の自然価格にかんする研究においては、A・スミスは事実上——少なくともとどころで——商品の正しい価値規定に逃げ帰っている。これに反し、利潤の自然率または自然価格を論じている章では、彼は、その本来の課題を考察しているかぎりでは、取るに足りない決まり文句と同義反復に迷い込んでいる。彼が賃金や利潤や地代を規制するとしたものは、事実上、最初の商品の価値であった。ところが、つぎには彼は逆のやり方をする(それは、経験的な外観と日常の考えにより近いものである)。そうすると諸商品の自然価格は、賃金、利潤および地代の自然価格の合計によって算出され、見いだされねばな

らなう」(Theorien, Teil I, MEW, Bd. 26, Teil I, S. 68. 『学説史』第一分冊、『全集』②一、八六頁)。またマルクスは、第十章「労働と資財のさまざまな用途における賃金と利潤について」の内容に言及して、「これは、こまかいことに関係するにすぎず、したがって、競争にかんする章(に属し)、彼の扱い方で大いにけっこうである。まったく通俗的だ」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 228. 『学説史』第二分冊、『全集』②一、三〇一頁)といっている。

けれども、マルクスも認めているように(Vgl. ebenda, SS. 220-233. 同上、二八九—三〇九頁参照)、『国富論』第一篇の第八章〜第十章には鋭い観察や重要な指摘が数多く含まれている。また、それらの章ではスマスは——前記の第八章冒頭の部分以外でも——とどこどこで投下労働説および分解価値説に立ち帰っている。いま、この点を示すものとして、ここではさしあたり第八章から次の一文を引用しておくことにしよう。

「労働の賃金の増加は、価格のなかで賃金に分解される部分を増加させることによって、多くの商品の価格を必然的に増進させ、またそのかぎり、諸商品の国内と海外との双方における消費を減少させる傾向がある。とはいえ、労働の賃金を引き上げると同じ原因、つまり資財の増加は、労働の生産諸力を増進させ、より少量の労働でより多量の所産を生産させる傾向がある。多数の労働者を雇用する資財の所有者は、自分自身の利益のために、可能なかぎり最多量の所産を生産しようように、仕事を適当に分割し配分しようと必然的に努力する。同じ理由から彼は、自分か労働者かのいずれかが考えおよぶ最善の機械類を労働者に供給しようと努力する。ある特定の仕事場における労働者のあいだで起こることは、同じ理由から、一大社会における労働者のあいだでも起こる。彼らの数が多くなればなるほど、彼らはますます職業のさまざまな部門や小部門に自然に

分かれる。ますます多くの頭脳が、各人の仕事をおこなうのにもっとも適当な機械類の発明に従事し、したがってまた、そういう機械類が発明される見込みもますます多くなる。それゆえ、こういう改善の結果として、多くの商品が従来よりもはるかに僅かの労働によって生産されるようになるから、労働の価格の増進は労働の量の減少によって相殺されてなお余りがあるほどになるのである」(The Wealth of Nations, p. 88. 前掲訳書、一九〇頁、傍点は引用者)。

この一文の第一センテンスでスミスが、「労働の賃金の増加は、価格のなかで賃金に分解される部分を増加させることによって、多くの商品の価格を必然的に増進させ」云々と述べるさいには、彼は、——「分解される」という言葉の使用にもかかわらず——賃金を「価値」ないし価格の一構成要素と見なす構成価値説の見地に立っているのだが、しかし第二センテンス以下では彼は、およそ次のように思惟している。——「労働の賃金を引き上げるのと同じ原因、つまり資財の増加」は分業(工場内および社会内の)、機械の発明・応用などによって労働の社会的生産力を発展させ、こうして「より少量の労働でより多量の所産を生産させる傾向がある」、そこで、たとえ賃金が騰貴したとしても、その増加した賃金は「より多量の所産」に割り付けられることになり、商品一個ずつに割り当たたる部分は労働の生産性の上昇につれて減少する、そしてそのさい、「多くの商品が従来よりもはるかに僅かの労働によって生産されるようになる」ので、「労働の価格」=賃金の騰貴にもかかわらず、「多くの商品」の価格はむしろ下落することになる、と。^(注)このように考える場合、スミスが投下労働量あるいは労働時間による価値規定を固持していることは明らかであろう。

(注) なお、これとほぼ同じ主旨の文章が第十一章「土地の地代について」の終り部分にも見いだされる。——「改良の

自然的効果は、ほとんどすべての製造品の実質価格を次第に減少させるということである。製造業の製品の実質価格は、おそらくそのすべてについて例外なく減少するであろう。よりよき機械や、より優れた技巧や、より適切な作業の分割ならびに配分は、すべて改良の自然的効果であって、そのために、ある特定のまとまった仕事をおこなうのに必要な労働量もはるかに少なくてすむようになり、たとえ社会環境が繁栄に向かう結果として労働の実質価格がきわめて甚だしく上昇することがあっても、その量の大幅な減少は、一般にその価格に起こらうべき最大の上昇を相殺してはるかに余りあるものになるであろう」(Ibid., p. 242. 同上、四二四頁、傍点は引用者)。

しかし、『国富論』第一篇第八、第十章におけるスミス本来のテーマ、すなわち賃金および利潤の「自然率」を規定するという点については、事情はどうであろうか？

アダム・スミスは第八章「労働の賃金について」のなかで次のようにいっている。——「人間というものは、つねに自分の労働によって生活しなければならぬし、また彼の賃金は、少なくとも彼を扶養するに足りるものでなければならぬ。たいていの場合、賃金は、いく分かはこれ以上のものでさえなければならぬのであって、さもないかぎり、彼が家族を養育することは不可能であろうし、このような職人たちの家系は一代かぎりになってしまうであろう」(Ibid., pp. 69-70. 同上、一六三頁)。

このようにスミスは、賃金は労働者が彼およびその家族の生活を維持するのに十分なだけの生活手段でなければならぬと考える。そして、すでに見ておいたように、スミスが利潤および地代をいずれも付加価値からの「控除」だとして分解価値説を展開するさいには、彼は、この必要生活手段の価値を投下労働量によって規定していたのであった。すなわち、彼は、労働者を事実上、労働力商品の所有者と解しつつ、この労働力の価値が他の諸商品の価値と同様、その生産および再生産に必要な労働時間によって規定されていることを、ともかくも把

握していたわけである。また、それだからこそスミスは、マルクスが評価していたように、「剰余価値の眞の源泉」を認識するとともに、利潤および地代をいずれも剰余価値の一分肢として擱むことができたのである。

しかし、スミスが賃金をもって「自然価格」の第一の構成要素と見なし、かつ、その「自然率」を問題にする場合には、投下労働量あるいは労働時間による価値規定がすでに捨て去られているので、右の一文に示されている賃金規定もまったく無意味なものになってしまう。^(注)この点を指摘してマルクスは次のように書いている。――

「実際に、この章〔第八章〕は、賃金の、いいかえれば労働能力の価値の、最低限の規定のほかには、問題に係のあるものをなにも含んではいない。ここ〔前述の第八章冒頭部分〕でスミスは本能的に再び彼のより深い観点に立ち帰っているが、つぎにはこの観点をまたしても捨て去り、そのために前記の規定〔すなわち、われわれが右に引用した賃金規定〕でさえなんの〔意味〕ももたない。では、必要生活手段の――したがって商品一般の――価値を、なによって規定するのか？ 一部は、労働の自然価格によって。では、これをなによって規定するのか？ 必需品の、または商品一般の、価値によって。情けない板ばさみだ。その他の箇所では、この章は、その問題すなわち労働の自然価格については一語も含んではいない」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 221. 『学説史』第二分冊、『全集』②①、二九〇頁、傍点はマルクス)。

(注) アダム・スミスは、「労働の価格」について次のようにいっている。「……通俗的な意味では、労働は諸商品と同じように、実質価格と名目価格とをもっている、といってもさしつかえなからう。その実質価格は、それと交換に与えられる生活必需品や便益品の量であり、その名目価格は貨幣の量である、といつてさしつかえなからう。労働者が富んでいるか貧しいか、彼の報酬が十分か不十分かは、彼の労働の実質価格に比例してであつて、名目価格に比例してではない」(The Wealth of Nations, p. 35. 前掲訳書、一一〇頁)。

アダム・スミスの自然価格論について(中) (岡崎)

この文章は第五章「諸商品の実質価格と名目価格について、すなわち、それらの労働価格と貨幣価格について」からのものであるが、すでに述べたように、第五章のこの標題は、「労働はいっさいの商品の実質価格である」から諸商品の「実質価格」はこれを「労働価格」と呼びかえることができるというスミス独自の考えを端的に示しているといつてよい。ところで、上掲引用文ではスミスは、他の諸商品の場合と同じく、「労働」についても「実質価格」と「名目価格」とを区別しているのだが、しかし、そのさい彼は、右の彼独自の考えを「労働」には直接的な形では適用せず——もしそうすれば「労働」の「実質価格」は「労働」の「労働価格」だということになる——、ある商品(いまの場合「労働」)が支配しうる労働量を、その商品が支配しうる生産物量(すなわち、ここでは「生活必需品や便益品の量」)に置きかえて、「労働」の「実質価格」は「それ〔労働〕と交換に与えられる生活必需品や便益品の量」だとしている。つまり、支配労働説の見地に立つスミスは、「通俗的な意味」での「労働の実質価格」を規定するにあたって、労働者およびその家族の必要生活手段の価値を問題にすることなく、もっぱら「それ〔労働〕と交換に与えられる生活必需品や便益品の量」だけを眼中に置くわけである。

なおマルクスは、アダム・スミスが、「文明社会」資本主義社会では支配労働量による価値規定だけが妥当すると主張するのはなぜか、という点を深く掘り下げて問題にしつつ、次のように述べている。

「労働者の必需品がたんに穀物だけから成っていて、彼の必要な生活手段量は一月当たり穀物一クォーターであると仮定しよう。そうすれば、彼の「一月月の」労賃の価値は穀物一クォーターの価値に等しい。一クォーターの穀物の価値が上下すれば、一月月の労働の価値も上下する。しかし、一クォーターの穀物の価値がどんなに上下しても(一クォーターの穀物に含まれている労働が多くなろうと少なくなろうと)、それはつねに一月月の労働の価値に等しい。／＼として、ここにこそ、なぜA・スミスが、資本したがってまた賃労働が介在するようになれば、生産物に投下された労働量ではなく生産物の支配しうる労働量がその生産物の価値を規制するというのか、その隠れた理由がある」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 404. 『学説史』第二分冊『全集』②、五四一頁、傍点はマルクス)。

「リカードウは次のようにいつている。一クォーターの穀物はつねに同じ量の労働を支配するとはいへ、または同

じ量の労働によって支配されるとはいえ、それは非常に違った価値をもつ、と。A・スマスは次のようにいう。そのとおりだ、労働時間によって規定される一クォーターの穀物の価値がどんなに変動しようと、労働者は、それを買うためには、つねに同じ量の労働を支払わなければ（犠牲を払わなければ）ならない。したがって穀物の価値は変動するが、しかし労働の価値は変動しない。なぜなら、一カ月の労働は一クォーターの穀物に等しいからである。穀物の価値もまた変動するが、それは、ただ、われわれがその生産に必要な労働を考察するかぎりでのことである。これに反して、われわれが、穀物と交換され、穀物によって動かされる労働量を考察するならば、穀物の価値は変動しないのである。それだからこそ、一クォーターの穀物と交換される労働の量が価値の標準尺度なのである、……と」(Ehenda, SS. 404-405. 同上、五四一—五四二頁、傍点はマルクス)。

こうして、賃金を「自然価格」の第一の構成要素と見なすスマスは、たとえば、「現在のところ、大ブリテンにおける労働の賃金は、明らかに、労働者が家族を養育しうるのにちょうど必要なものよりも多いように思われる」(The Wealth of Nations, p. 75. 前掲訳書、一七二頁)として、この点を示す若干の「平明な徴候」について説明するのだが、そのさい彼は、結局のところ次のようにいわざるをえない。——「注意しなければならないのは、同じ場所で同種の労働にたいして支払われる労働の価格でも、職人たちの能力の差異ばかりではなく、親方たちが寛大か冷酷かによって違うことがしばしばあるから、それを非常に正確に確認することは、どのような場所でもできるはずがない、ということである。賃金が法律によって規制されていないところでは、われわれがあえて決定しうるこのすべては、もつとも日常的な賃金は、どれほどかということであって、また経験も、たとえ法律はしばしばあえてこれを規制しようとしたけれども、適切に規制することはとうていできなかった、ということを示しているように思われるのである」(Ibid., p. 79. 同上、一七七頁、傍点は引用者)。ちなみに、「ここにいう」も

「最も日常的な賃金(the most usual wages)」についてスミスは、たとえば、「スコットランドの」低地地方の大部分をつうじて、ふつうの労働のもと、日常的な賃金は現在、一日八ペンスであるが、エディンバラ付近や、近隣だということから恐らく影響されるイングランドに近接する諸県や、ちかごろ労働にたいする需要がかなり増加してきた他の数地方、つまりグラスゴウ、キャロンおよびエアシャなどの付近では十ペンスであり、ときには一シリングである」(Ibid., p. 78. 同上、一七六頁、傍点は引用者)という。つまりスミスは、彼が賃金を「自然価格」の一構成要素だとするさいには、実際上はもっぱら「経験」の世界に踞踏して、「もともと日常的な賃金はどれほどか」を問題にするにすぎないわけである。^(注)

(注) といつても、このことは第八章のあちこちに重要な指摘が見られることを否定するものではない。たとえば、同章では、資本主義のもとでの競争の矛盾を説いた次のような所論が展開されている。

「労働のふつうの賃金がどうなっているかということは、どのようなところでも、その利害関係をけつして同じくしない両当事者間に通常むすばれる契約に依存する。職人たちはできるだけ獲得したが、親方たちはできるだけ少なく与えたがる。前者は労働の賃金を引き上げるために団結し、後者はそれを引き下げるために団結する傾向がある。

「とはいえ、通例すべての場合、争議において両当事者のどちらが必ず有利な地歩を占めるか、つまり、どちらが必ず他を強制して自分たちの条件に服従させるか、ということを見するのは困難ではない。親方たちは、その数がより少ないから、はるかにたやすく団結できるし、そのうえ法律は、親方たちの団結を権威づけ、あるいは、少なくともこれを禁止してはいないのに、職人たちの団結を禁止しているのである。われわれは、労働の価格を引き下げるための団結を禁止する議会の法令をまったくもたないが、それを引き上げるための団結を禁止するものを数多くもっている。このようなすべての争議の場合、親方たちははるかに長期間もちたえることができる。地主、農業者、親方製造業者または商人は、たとえ職人を一人も雇用しないでも、既得の資財で一年や二年ぐらいたいてい生活しよ

うと思えばできる。多くの職人は、仕事がなければ、一週間とは生存できないであろうし、一カ月生存できる者は少数で、一カ月生存できる者などはほとんどまっぴくなかろう。長期間をとってみれば、職人にとって親方が必要であるように、親方にとっても職人が必要なのであろうが、親方にとっての必要はそれほどさし迫ったものではない」(Ibid., p. 68. 同上、一六〇—一六一頁)。

なお、この文章は、初期のエンゲルス(『国民経済学批判大綱』)や、同じく初期のマルクス(『経済学Ⅱ哲学手稿』)がとくに重要視したものであつて、この点にかんしては拙稿「初期マルクスの経済理論について」(本誌第十六巻第三・四合併号、九四—一〇一頁)を参照されたい。

ところで、こんどはわれわれは、「自然価格」の第二の構成要素とされる利潤の「自然率」についてスミスの語るところを聞くことにしよう。第一篇第九章「資財の利潤について」の冒頭部分で彼は次のようにいう。

「すでに述べたことであるが、労働の平均賃金がどれだけであるかを確認するのは、ある特定の場所や、ある特定の時期においてさえ、たやすくはない。われわれは、こういう場合でさえ、もつとも日常的な賃金を決定するのがやつのことである。ところが、資財の利潤にかんしては、こういうことさえめつたにできない。利潤は非常に波動するものであつて、ある特定の事業を営んでいる人でさえも、必ずしも自分の年利潤の平均がどれだけかということを語れぬほどである。……一大王国で営まれているありとあらゆる事業の平均利潤がどれほどかを確認するのはなおさら困難にちがいないし、また、かつてのそれがどれほどだったろうかとか、あるいは遠い昔のそれがどれほどだったろうかとか、ということのある程度正確に判断するなどは、まったく不可能にちがいないのである」(The Wealth of Nations, p. 89. 前掲訳書、一九二—一九三頁)。

このようにスミスは、「労働の平均賃金」を確認すること自身が相当に困難で、「ある特定の場所」・「ある特定

の時期」についての「もっとも日常的な賃金を決定するのがやっとのことである」のに、「利潤は非常に波動する」ので、「ある特定の事業を営んでいる」個別資本家自身でさえ「必ずしも自分の年利潤の平均がどれだけかということ語れぬほど」だし、ましてや一国の「あらゆる事業の平均利潤がどれほどかを確認するのはなおさら困難にちがいない」と慨嘆する。しかし、スミスの考えでは、「利子の推移に導かれて、われわれは利潤の推移についての「あるいは「資財の平均利潤が現在または過去においてどれほどであるか、またあったか」についての」ある観念をつくりあげることにはできる」(Cf. *Ibid.*, p. 90. 同上、一九三頁)。というのは、「貨幣の使用によって多くのものが得られるところではどこでも、ふつうその使用にたいして多くのものが与えられるだろうし、また、それによって僅かのものしか得られぬところではどこでも、ふつうそれにたいして僅かのものしか与えられぬだろう」ということは、一個の原則として確言してさしつかえない」(*Ibid.*, p. 90. 同上、一九三頁)からである。こうしてスミスは、利子率をもって利潤率のおおよその状態を示すメルクマールだとして、いろいろな時期における利子率の状態の歴史的考察に移るのであるが、しかし、もともと問題は「自然価格」の一構成要素とされる利潤の「自然率」を規定することにあつたのだから、これは一種の問題回避だというほかはない。この点にかんしてマルクスは、『学説史』(第二分冊)のなかでスミスを次のように批判している。「……課題は、与えられたいろいろな違う利潤率の状態を比較することではなくて、利潤率の自然率を規定することであつた。スミスは、いろいろな時期の利子率の状態にかんする副次的研究に逃げこんでいるが、これは、彼自身が提出した問題とはまったくなんの関係もないものである」(*Theorien*, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, SS. 225-226. 『学説史』第二分冊『全集』II ②⑥、二九七頁、傍点はマルクス)。またマルクスは、『国富論』第一篇第九章でスミスが、「大ブリテンでは利子の

二倍が、商人のいう**妥当な、中庸の、合理的な利潤** (a good, moderate, reasonable profit) だと見なされているが、これらの表現は、私の理解するところでは、ふつうの**日常的な利潤** (a common and usual profit) を意味するものにほかならない」(The Wealth of Nations, p. 99. 前掲訳書、二〇七頁、傍点は引用者) として、これを批判して次のように述べている。——「実際にはスミスは、この『ふつうの日常的な利潤』を『中庸の』とも『妥当な』とも呼ばないで、それに『利潤の自然率』という名称を与えているのである。ところが、われわれはこの『利潤の自然率』によって商品の『自然価格』を規定しなければならないのに、それがなであるか、またはそれがどのようにして規定されるのかは、まったくにも述べられていないのである」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 227. 『学説史』第二分冊、『全集』②Ⅱ、二九九頁、傍点はマルクスの)。

要するに、『**国富論**』第一篇第八章と第十章でスミスが、「**自然価格**」の構成要素としての賃金および利潤の「**自然率**」を取り扱うときには、彼は**日常的経験の世界に身を置いていて**、「ある特定の場所」・「ある特定の時期」における「**もつとも日常的な賃金**」を賃金の「**自然率**」だとし、また「ふつうの日常的な利潤」——それは彼によれば「**大ブリテンでは利子の二倍**」だ——を利潤の「**自然率**」と名づけるにとどまっているのである。いかえれば、この場合には彼は、すでに労働時間による価値規定を放棄しており、もっぱら「**現象の観点**」から「**競争のうち**に現われると**おりの事物の関連**」を観察しているにすぎないわけである。だからまた、賃金の「**自然率**」についても利潤の「**自然率**」についても、「それがなであるか、またはそれがどのようにして規定されるのか」は、これらの章での詳論によっても依然として不明のままである。

さて、それでは第十一章「**土地の地代**」について「**にあっては事情はどうであろうか？**」第七章末尾でのスミス

自身の課題設定によれば、この第十一章は当然、「自然価格」の最後のもう一つの構成要素たる地代の「自然率」を規定するはずのものである。ところが、——驚いたことに——ここではスミスは、これまでの彼の「自然価格」概念(∥平均賃金+平均利潤+平均地代∨)と、それに基づく自然価格・市場価格論とを自分自身で否定し崩壊させるのである！以下、節をあらためて、この間の事情を詳しく見てゆくことにしよう。

二 第二の「自然価格」概念とその理論的意義

『国富論』第一篇第十一章の序論的部分でアダム・スミスは、まず最初に、「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる地代は、当然、借地人がその土地の現実の諸事情のもとで支払いうる最高の価格である」と述べたあと、ひきつづき次のようにいう。

「借地契約の条件をとり決める場合、地主は、借地人が種子をとり、労働に支払い、家畜、他の営農用具を、購入・保全すべき資財を維持するのに足りる額に、その近隣における農業資財の通常利潤を加えた額よりも大きな生産物の分け前が、借地人の手もとに残らぬように努力する。この分け前は、明らかに、借地人が損をせずに満足できる最少の分け前であって、地主がこれ以上の分け前を借地人に残そうとする場合はめったにない。この分け前を越える生産物部分、またはこれと同じことであるが、その価格部分がどれほどであろうとも、地主がそれをこの土地の地代として自分の手もとに留保しようと努力するのは当然であり、またこの地代が、その土地の現実の諸事情のもとで借地人が支払いうる最高のものであることも明らかである」(The Wealth of

Nations, p. 145. 前掲訳書 二七九頁、傍点は引用者。

ここではスミスは、われわれが傍点を付した箇所から明らかのように、かの「第四の部分」(C部分)の存在を認めている。そして彼は、「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる地代」は土地生産物の価格のうち、「借地人が種子をとり、労働に支払い、家畜その他の営農用具を購入・保全すべき資財を維持するのに足りる額に、その近隣における農業資財の通常利潤を加えた額」を越える、「価格部分」にはかならないと考える。

すなわち、ここでは地代は、土地生産物の価格のうち、補填されるべき前貸資本(流動資本・プラス・「第四の部分」に平均利潤を加えた額——簡単にいえば「資本補填分+平均利潤」——)を越える「価格部分」とされているわけである。そしてスミスは、こういうものとしての地代を「土地の自然的地代(the natural rent of land)」と名づけるのである(Cf. *ibid.*, p. 145. 同上、二七九頁参照)。

ところでスミスは、やはり第十一章の序論的部分のなかで、土地改良のために投下された資本の利子と、「本来の地代(the original rent)」とを区別しながら、次のように述べている。

「土地の地代は、地主が土地の改良のために費やした資財にたいする妥当な利潤または利子にすぎぬことがしばしばある、と考えられるかも知れない。疑いもなく、場合によってはある程度そのとおりであろう、というのは、この程度以上にそうたということはほとんどまったくありえないからである。地主は未改良の土地にたいしてさえ地代を要求するのであって、改良費の推定される利子または利潤は、一般にこの本来の地代にたいする追加分である。そればかりではなく、こういう改良は、必ずしもつねに地主の資財によってなされるとはかぎらず、借地人のそれによってなされる場合もある。それにもかかわらず、借地契約が更新されるときが

くると、地主は通例、これらの改良がすべて自分の資財でなされたものであるかのように、それと同じだけの地代の増額を要求するのである」（*Ibid.*, pp. 145-146. 同上、二七九—二八〇頁、傍点は引用者）。

このようにアダム・スミスは、「地主は未改良の土地にたいしてさえ地代を要求すること、また、土地の改良は必ずしも地主自身の資本によってなされるとはかぎらないことなどの点を指摘しながら、「本来の地代」を土地資本の利子——これはスミスの考えでは「本来の地代」への「追加分」にすぎない——から明確に区別する（注1）してみれば、さきほど第十一章冒頭の一文でスミスが、「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる地代は」云々と述べたさいの「地代」は、この「本来の地代」、すなわち、借地農業者が地主に支払う借地料のうち土地資本の利子を控除した残余の部分にほかならなかつたわけである（注2）。

（注1） スミスはまた、「彼（地主）は、ときによっては人間が全然改良できぬものにたいしても地代を要求する」として、この点を次のような具体例で説明している。

「ケルプは海草の一種であつて、これを焼くと、ガラス、石鹼その他種々の目的に役立つアルカリ性の塩類がとれる。それは、大ブリテンのいくつかの地方、とくにスコットランドの、満潮水位標よりも下の、毎日二回海水につかるようなところにある岩だけに生育し、したがって人間の勤労によつてはけつして増加されない産物である。それにもかかわらず、その所有地がこの種のケルプを産出する海岸に隣接している地主は、自分の穀物畑にたいしてと同じだけの地代をそれにも要求するのである」（*Ibid.*, p. 146. 同上、二八〇頁）。

（注2） マルクスは、『資本論』第三卷（第六篇「超過利潤の地代への転化」）のなかで、スミスのこつした地代把握を支持して次のように述べている。

「資本は、土地に固定されることができ、土地に合体されることができ。それは、化学的な性質の改良や施肥などの場合のように一時的事業的なこともあれば、排水溝や灌漑設備や地均らしや農場建物などの場合のように恒

久的なこともある。このように土地と合体された資本を、私は別のところ〔『哲学の貧困』で土地資本 (a terre-capital) と呼んだことがある。それは固定資本の範疇に属する。土地に合体された資本やこのように生産手段としての土地に加えられる改良にたいする利子は、借地農業者が土地所有者に支払う借地料の一部分をなしていることもありうるが、しかし、それは、土地が自然状態にあらうと、すでに耕作されていようと、土地の使用そのものに支払われる、本来の地代を構成するものではない〕(Das Kapital, Bd. III, MEW, Bd. 25, S. 632. 『資本論』第三卷、『全集』②b、七九九頁、傍点は引用者)。

なおまたマルクスは、「本来の地代」と土地資本の利子とを区別することの理論的意義を説いて、次のようにいっている。

「地代——すなわち資本主義的生産様式の基礎上で土地所有の独立な、独自の経済的形態——の科学的な分析のためには、地代を不純にし蔽い隠すいっさいの混合物を取り去って地代を純粹に考察することが重要であるが、同様に、他方では、土地所有の実際上の諸効果を理解するためには、また、地代概念や性質とは矛盾していながらしかも地代の存在様式として現われる多くの事実を理論的に認識するためにも、このような理論の混濁の源泉になる諸要素を知っておくことが重要なのである」(Ehenda, SS. 637-638. 同上、八〇六頁)。

こうして A・スミスは、「本来の地代」を土地資本の利子からはっきりと区別するのであるが、さらにすすんで彼は、この「本来の地代」は「一個の独占価格 (a monopoly price)」だとして次のように論述する。

「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる土地の地代は、当然、一個の独占価格である。それは、地主が土地の改良のために費やしたであろうもの、または彼が取得しようものにはまったく比例せず、農業者が支払うるものに比例するのである。

「土地生産物のなかでふつう市場へもたらされる部分は、その通常価格が、それを市場へもたらすために使用されねばならない資財を、その通常利潤とともに回収するに足りるようなものだけである。もしこの通常

価格がこれ以上であれば、その剰余部分は当然、土地の地代になるであろう。もしこの通常価格がこれ以上でないなら、たとえ商品は市場へもたらされるかも知れないにしても、この価格は地主に地代を与えることができない。この価格がこれを越えるかどうかは需要に依存するのである。

「土地生産物の若干部分にたいしては、それらを市場へもたらすのに十分な価格よりも高い価格を必ずつねに生じさせるほどの需要があるけれども、他の諸部分にたいしては、こういうより高い価格を生じさせるほどの需要があるときもあるし、ないときもある。前者は必ずつねに地主に地代をもたらず。後者はそうしうるときもあるし、そうしえないときもあるのであって、それはさまざま事情に応じてそうなるのである」(*The Wealth of Nations*, p. 146. 前掲訳書、二八一頁、傍点は引用者—— \blacktriangleleft 引用 \blacktriangleright)。

この \blacktriangleleft 引用 \blacktriangleright の第二パラグラフでスマミスが、「それ(販売される土地生産物)を市場へもたらすために使用されねばならない資財」というとき、この「資財」なる語が補填されるべき前貸資本(第四の部分)を含めての(を意味していることは、すでに見ておいたところである。^(注1)そしてスマミスは、このような意味での「資財」を「その通常利潤とともに回収するに足りる」価格、つまり \blacktriangleleft 資本補填分+平均利潤 \blacktriangleright のことを、第三のパラグラフでは「十分な価格」と^(注2)いっているわけである。ところで右の \blacktriangleleft 引用 \blacktriangleright では、いまや彼は次のように主張する。——

(i)土地生産物が「ふつう市場へもたらされうる」条件はその「通常価格(the ordinary price)」が「十分な価格」(\blacktriangleleft 資本補填分+平均利潤 \blacktriangleright)に達しているということであって、もしこの「通常価格」がこれ以上に高ければ、その「剰余部分」は当然、地代になる、けれども「通常価格」が「十分な価格」以上でなければ、たとえ「商品は市場へもたらされる」にしても、「この価格は地主に地代を与えることができない」、(ii)土地生産物の「若干部

分」にたいしては「十分な価格よりも高い価格を必ずつねに生じさせるほどの需要がある」ので、それらは「必ずつねに地主に地代をもたらず」が、土地生産物の「他の諸部分」の場合には、「こういうより高い価格を生じさせるほどの需要がある」とはかぎらないから、それらは——いろいろの事情次第で——地主に地代をもたらしうるときもあれば、そうしえないときもある、と。

(注1) スミスが第十一章で次のように述べるさいにも、彼は「第四の部分」の存在を認めているといえよう(ただし、一番目の引用文では彼は固定、不変資本の補填の問題を忘れているが)。

「中位の多産性をもつ穀物畑は、同じ面積の最上の放牧地よりも、人間の食物をずっと多量に生産する。たとえその耕作にずっと多くの労働を必要としても、種子を回収したり、このすべての労働を扶養したりしたあとになお残る剰余は、やはりはるかに大きいのである」(*Ibid.*, p. 149. 同上、二八四頁、傍点は引用者)。

「大ブリテンや他の二、三の北方諸国では、比較的優良な果実は、隔壁の助けをかりなければ仕上げられない。それゆえ、このような国々でのこういう果実の価格は、その生産に不可欠な隔壁の建設費や維持費を支払うに足りるものでなければならぬ。果樹園の隔壁が野菜園の周囲につくられることもしばしばであって、そのために、野菜園はそれ自体の生産物ではめったに支払いきれぬような困い込みの利益を享受するのである」(*Ibid.*, p. 154. 同上、二九三頁、傍点は引用者)。

もっとも、アダム・スミスは第十一章においても、しばしば「第四の部分」の存在を見落すのであって、たとえば彼が次のようにいうときには、そうである。「ペルーの銀山が発見されてから、ヨーロッパの銀山は大部分放棄された。それは銀の価値がいちじるしく引き下げられたので、ヨーロッパの銀山の生産物ではそれを稼働させるための経費をもはや支払えなくなったからであり、いかえればその経営で消費された食、衣、住その他の必需品を利潤とともにもはや回収できなくなったからである」(*Ibid.*, p. 169. 同上、三一四—三一五頁、傍点は引用者)。

見られるように、スミスは流動可変資本の素材的内容を労働力としてではなく、労働者が賃金によって購買する生活手段(「食、衣、住その他の必需品」)そのものの形態でとらえるのだが、それはともかく、ここでスミスが、「経

費(Expense)」という言葉で前貸可変資本と利潤とだけを含意させ、こうして前貸不変資本の補填の問題を——だからまた商品価値における「第四の部分」の存在を——忘れていたことは明らかであろう。

(注2) ただスミス自身は「十分な価格(the sufficient price)」という用語を使っているわけではない。いま、当該箇所原文を示しておけば次のとおりである(イタリツクは引用者)。——“There are some parts of the produce of land for which the demand must always be such as to afford a greater price than what is sufficient to bring them to market.”

マルクスは『剰余価値学説史』(第二分冊)においてスミスのこの文章を次のように訳している(Vgl. Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 351. イタリツクは引用者)。——“Es gibt einige Teile des Bodenprodukts, nach denen die Nachfrage stets so stark sein muß, daß sie einen höheren Preis ergibt als den, der ausreicht, um sie auf den Markt zu bringen.” そしてマルクスは、われわれが本文に掲げた△引用K▽でのスミスの所説を論評するに際しては“sufficient price”とか“prix suffisant(また”ときには sufficient Preis)”といった語句をスミス地代論特有のカテゴリーとして使っている。マルクスがそうしたのは、地代にかんするA・スミスの主張をより明確に示すためであったと思われるが、上掲の△引用K▽でわれわれが、スミスの“what is sufficient to bring them to market”という章句を、「それらを市場へもたらすのに十分な価格」と訳したのも、同じ考えからにはかならない。ついでながら、大内兵衛・松川七郎両氏の前掲訳書ではこの部分が、「それを市場へもたらすのに十分なもの」となっており、また、『全集』版『剰余価値学説史』(第二分冊、訳者は時永淑氏、「統一者」は岡崎次郎氏)では同じ部分が、「それを市場へもたらすのに十分な価格」と訳出されている(『全集』②①、四六五頁参照)。

しかしながら、スミスの右のような主張は、第七章における彼自身の自然価格・市場価格論と大きく異なっているといわれなければならない。第七章ではスミスは、「それ(ある商品)を産出し調製し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃金と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がない」価格をもって「自然価格」だとしていた。また、そこでは彼は、「商品の自然価格をよろこん

で支払う人々の需要」を「有効需要」と名づけけるとともに、供給側についても、「商品を市場へもたらす」のに「十分」な価格は「自然価格」(=平均賃金+平均利潤+平均地代)だとしていた。そして彼は、「市場へもたらされるある商品の量」が「有効需要」を下回るか、上回るか、ちょうどそれと一致するかに応じて、市場価格は「自然価格」以上になったり以下になったり、またそれと一致したりすると説いていた。そのさい彼は、市場の状態のために地代がその「自然率」よりも低下または上昇した場合を問題にしながら、次のように述べていた——「もしある場合にこの量(市場へもたらされるある商品の量)が有効需要を超過すれば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以下で支払われるにちがいない。もしそれが地代なら、地主たちの利害関係が彼らを刺激し、即刻にもその土地の一部を引き上げさせるであろう……」。「これに反して、もしある場合に、市場へもたらされる量が有効需要におよばないようなことが起れば、その価格の構成部分のあるものは、自然率以上に上昇するにちがいない。もしそれが地代なら、他のすべての地主の利害関係が自然に彼らを刺激し、この商品を産出するためにいっそう多くの土地を用意させるであろう……」。またスマスは、「ある商品の市場価格が、たとえ長く自然価格を上回ることはあっても、ひきつづき長くそれを下回ることにはめったにありえない」として、こうも述べていた。「自然率以下に支払われるのがどのような部分であろうとも、その利害関係に影響をこうむる人々は、ただちに損失だと思い、その土地、その労働またはその資財のいずれかを、その用途からただちに引き上げるであろうから、市場へもたらされる量は間もなく有効需要をちょうど充足するに足りるだけになるであろう。それゆえ、その市場価格は間もなく自然価格にまで上昇するであろう。少なくとも、完全な自由がおこなわれていたところでは、これが事実であろう」。

要するに、第七章では、ある商品の市場価格がその「自然価格」($\parallel \wedge$ 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee)に達していることが、「商品を市場へもたらす」ための条件だとされており、「いっさいの商品の価格」はこの「自然価格」を重点点として騰落するものとされてきたわけである。そして同章ではスミスは、自由競争がおこなわれるかぎり、地代が恒常的にその「自然率」以下に低下することはありえない——なぜなら、「地主たちの利害関係が彼らを刺激し、即刻にもその土地の一部を引き上げさせる」から——、したがって、土地が生産にはいる場合には地代はつねに、「価格の構成部分」をなす、と主張していたのであった。

ところが、いまや A・スミスは、「十分な価格」に \wedge 資本補填分+平均利潤 \vee を含意させながら、土地生産物が「ふつう市場へもたらされる」条件はその「通常価格」が「十分な価格」に達していることだという。そして彼は、土地生産物の「通常価格」がその「十分な価格」を越えた「剰余部分」をもって地代だとし、かつ、「通常価格」が「十分な価格」を越えて地代をもたらすかどうかは「需要」のいかんによるとする。したがって、この場合には、地代は「十分な価格」からは最初から除外されており、また、それは土地生産物の「通常価格」にも必ずしもはいらないわけである。

(注) ここでわれわれは、この「需要」がこれまでの「有効需要」とは意味を異にしている点に留意すべきである。すなわち、ここにいう「需要」は、「商品の自然価格」($\parallel \wedge$ 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee)をよるこんで支払う人々の「需要」ではなく、——第十一章のある箇所でのスミス自身の言葉でいえば——「支払能力のある人々」の需要のことだと解すべきであろう(Cf. *The Wealth of Nations*, p.156. 前掲訳書、二九五頁参照)。

こうして地代は、いまや「自然価格」の構成要素の一つではなくなり、土地生産物の「通常価格」がその「十分な価格」($\parallel \wedge$ 資本補填分+平均利潤 \vee)を越えたさいの剰余分にすぎないものとされる。そしてスミスは、土地

生産物の「若干部分」の場合には、「十分な価格」以上の「高い価格を必ずつねに生じさせるほどの需要がある」ので、それらは「必ずつねに地代をもたらす」が、その他の土地生産物にあっては、それほどの需要があるとはかぎらないから、地代が生ずるときもあれば、生じないときもあるという。つまり、ここでは地代は、需要が「十分な価格」での供給を越えたいの、「十分な価格」を上回る「通常価格」の剰余分として説明されるわけである。

しかし、スミスが地代をこのように説明することは、第七章（および後続の第八、第十章）での自然価格・市場価格論——そこでは、地代が恒常的にその「自然率」以下になっていることはありえず、だからまた、土地が生産にはいる場合には地代はつねに、「価格の構成部分」をなすとされていた——を彼自身が否認したことを意味するものにはかならない。この点を指摘してマルクスは次のように述べている。——「スミスはこの第十一章ではまったく一変している。地代はもはや自然価格 (prix naturel) のなかにはいらぬ。というよりはむしろ A・スミスは、自然価格と違っているのが普通である通常価格 (prix ordinaire) に逃げ道を求めている。といつても、われわれは第七章では次のように聞かされていたのである。すなわち、通常価格が長期間にわたり自然価格よりも低くなっていることはけつしてありえないし、また、自然価格の構成部分のどの一つでもが長期間にわたつてその自然率よりも低く支払われているとか、ましてや、いま彼が地代について主張したように〔前掲△引用K▽参照〕全然支払われないでいるなどということは、けつしてありえないのである」と (Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 350. 『学説史』第二分冊、『全集』②Ⅱ、四六三頁、傍点はマルクス、ゴシックは引用者)。またマルクスは、もっと端的に、「彼〔スミス〕は自然価格にかんする自分の全学説をこの十分な価格をもつてくつがえして

「まゝだ」(Benda, S. 352. 同上、四六六頁、傍点は引用者)ともいっている。

けれども、じつはスミス自身も、こうした自説の変化に気づいていたのであって、だから彼は△引用K▽の文章のすぐあとで、われわれにたいして次のように「注意」している。

「それゆえ、注意すべきことは、地代は賃金や利潤とは異なった仕方、諸商品の価格の構成に参加する、ということである。賃金や利潤の高低は価格の高低の原因であるが、地代の高低はその結果である。特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤に高低があるからである。しかし、その商品の価格が生じる地代が高かったり、低かったり、あるいは全然地代を生じなかったりするものは、その価格に高低があるからである、いいかえれば、その価格が、これらの賃金や利潤を支払うに足りる以上に、はるかに余ったり、ごく僅かしか余らなかつたり、または少しも余らなかつたりするからである」(The Wealth of Nations, p. 147. 前掲訳書、二八一—二八二頁、傍点は引用者、——△引用L▽)。

第一篇第七章ではスミスは、賃金、利潤および地代がそれらの「自然率」にしたがって一様に、「自然価格」の構成にはいるものとしていた。ところが、こんどは「地代は賃金や利潤とは異なった仕方、諸商品の価格の構成に参加する」のだという。また、以前には彼は、「賃金、利潤および地代は、いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉である」とする構成価値説の立場から、賃金、利潤および地代の変動は、そのいづれもが、「価格の高低の原因」をなすと解していたのだが、いまや彼は、「賃金や利潤の高低は価格の原因であるが、地代の高低はその結果である」とする。

なおまた第七章ではスミスは、たとえば地代がその「自然率」以下に減少するときには、土地の一部分が引き

上げられて、やがて市場価格が「自然価格」にまで上昇して平均地代がもたらされるようになる、と説いていた。しかし、こんどは彼は、 \wedge 資本補填分 $+$ 平均利潤 \vee を意味する「十分な価格」を念頭に置きながら、「特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤（すなわち「十分な価格」、ただし彼はここでは前貸不変資本の補填の問題を忘れている）に高低があるからである」と述べる。そして右の \wedge 引用 \vee では彼は、地代は「十分な価格」を越える剰余分だとの見地から、「特定の商品」の「通常価格」がその「十分な価格」よりもはるかに高ければ、それは多くの地代を支払うけれども、この超過分が「ごく僅か」であれば地代も少なくなり、また、ある商品の「通常価格」がその「十分な価格」と正確に一致するならば、それは少しも地代をもたささない、というふうに考えるわけである。

しかし、ここでわれわれは、前掲の \wedge 引用 \vee では「十分な価格」（ \parallel \wedge 資本補填分 $+$ 平均利潤 \vee ）の考えが土地生産物だけでなく非土地生産物にも適用されているという点を見落してはならない。この点は、そこでスミスが、とくに土地生産物に限定することなく、一般的形態で「諸商品の価格」や「特定の商品の価格」を問題にしつつ、「地代は賃金や利潤とは異なった仕方です諸商品の価格の構成に参加する」とか、「特定の商品の価格に高低があるのは、その商品を市場へもたらすために支払われなければならない賃金や利潤（すなわち「十分な価格」に高低があるからである」とか述べていたことから明らかであろう（なお、この点についてはのちに再論する）。ところで、以前にはA・スミスは、「商品を市場へもたらす」のに「十分」な価格は「自然価格」（ \parallel \wedge 平均賃金 $+$ 平均利潤 $+$ 平均地代 \vee ）だとしていた。だが、いまや彼は、総じて、商品が「ふつう市場へもたらされうる」条件はその「通常価格」が「十分な価格」（ \parallel \wedge 資本補填分 $+$ 平均利潤 \vee ）に達していることだとする。してみれば、前掲 \wedge 引用 \vee

においてスミスが、「注意すべきことは、地代は賃金や利潤とは異なった仕方で諸商品の価格の構成に参加する、ということである」云々と力説する場合には、彼はまさにそのことによって、「十分な価格」を、第七章(および第八・十章)での本来的な「自然価格」概念に代わるものとして提示しているわけである。そしてそのかぎりで見れば、第十一章になって現われる「十分な価格」をA・スミスの新たな、第二の「自然価格」概念と見なすことができるであろう(といっても、この「十分な価格」は土地生産物の場合には——のちに見る特殊なケースを除いては——市場価格の運動の重心点あるいは「中心価格」としての役割を果たさないのだが)。さきにわれわれが、本稿の「はじめに」で次のように書いたゆえんである。すなわち、アダム・スミスの「自然価格」概念は二重であって、 \wedge 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee を意味する第一の「自然価格」概念が説かれているのは第七章および後続の第八・十章においてであり、 \wedge 資本補填分+平均利潤 \vee を含まない「十分な価格」——第二の「自然価格」概念が現われるのは第十一章においてである、と。

ところで、『学説史』(第二分冊)においてマルクスは、A・スミスの「十分な価格」——第二の「自然価格」概念——の理論的意義を問題にしながら、次のように書いている。——「通常価格は、それが地代を含んでいる場合には、十分な価格(prix suffisant)よりも高い。地代を含んでいない場合には、十分な価格と同じである。しかも、十分な価格にとって特徴的なのは、それが地代を含まないということである。通常価格は、それが資本の補填分のほかに平均利潤を支払わない場合には、十分な価格よりも低い。したがって、十分な価格とは、実際には生産価格(Produktionspreis)すなわち費用価格(Kostenpreis)なのであって、これは……実際に資本主義的生産の立場からそう見るとおりのもの、いいかえれば、資本家の前貸のほかに通常利潤をも支払うところの価格、

資本のいろいろな充用部面で資本家間の競争が生み出すような平均価格なのである。競争からのこのような抽象こそが、スミスをして、彼の自然価格に十分な価格を対置するに至らせたのである。といつても、彼が自然価格を説明していたところでは、これに反して、自然価格の構成部分である地代や利潤や労賃を支払う通常価格だけが永続的に十分な価格である、と説いていたのであるが。資本家が商品生産を支配するのだから、十分な価格というのは、資本主義的生産にとって十分な、資本の立場からして十分な価格のことであり、この資本にとって十分な価格は、地代を含むことなく、むしろ反対にそれを排除するものなのである」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, SS. 351-382. 『学説史』第二分冊、『全集』②、四六五—四六六頁、傍点はマルクス)。

ここで指摘されているように、スミスの「十分な価格」とは實際上、「生産価格すなわち費用価格」のことであつて、それは、「資本家の前貸のほかに通常利潤をも支払うところの価格」、すなわち「資本補填分+平均利潤」であり、「資本のいろいろな充用部面で資本家間の競争が生み出すような平均価格」である。そして、前掲△引用LⅤにおいてスミスが、「地代は賃金や利潤とは異なった仕方です諸商品の価格の構成に参加する……」と強調する場合には、彼は、「資本家が商品生産を支配する」という点、——あるいは『経済学批判』「序説」でのマルクスの言葉でいえば——「資本はブルジョア社会のいっさいを支配する経済力である」(Zur Kritik, MEW, Bd. 13, S. 638. 『批判』、『全集』③、六三四頁)という点を洞察して、「十分な価格」とは「資本主義的生産にとって十分な、資本の立場からして十分な価格」つまり資本家的「費用価格」でしかありえず、この「資本にとって十分な」価格はその本性上、地代を排除する、という事情を正しく理解しているのである。こうした点にわれわれは、自説の展開において前後撞着しながらもA・スミスが第十一章で提起した「十分な価格」——第二の「自然

「価格」概念——の大きな理論的意義を認めるべきであろう。実際、同章の序論的部分でスミスが、地代を含まない「十分な価格」||「自然価格」概念をもってそれまでの第一の「自然価格」概念に代置したとき、彼は競争場裡の個別資本家の立場から「資本主義的生産の立場」ないし「資本の立場」へと、みずからの立場を転換させているのである。^(注)

(注) もっとも、「費用価格」から地代を除外するスミスのこうした見地は、第十一章になって突如として出てきたわけではなく、それはすでに第七章「諸商品の自然価格と市場価格について」のなかに伏在していたと考えられる。いまこの点を示すために、第七章から次の所論を引用しておこう。

「……彼〔資本家〕の利潤は彼の収入であり、彼の生存のための本来的な元本^{フランド}である。彼は、自分が財貨を調製し、市場へもたらすあいだ、自分の職人たちに賃金または生活資料を前払いするのと同じように、自分自身にも、その生活資料を前払いするのであって、この生活資料は、自分の財貨を売却することによって正当に期待しうる利潤に総じて相応するものである。それゆえ、この財貨が彼にこういう利潤を生み出してくれるのならともかく、そうでないかぎり、この財貨は、彼が、そのために、現実、に費やしたと、当然、いいうるものを彼に払い戻してはくれないのである。

「それゆえ、こういう利潤を彼に残してくれるような価格は、必ずしも商人がときにはその財貨を売る場合もなしとしない最低の価格とはかぎらないが、少なくとも完全な自由がおこなわれているところでは、いいかえれば、彼がその好むところにしたがって何回でも自分の職業をかえられるところでは、かなりの長期間、ひきつづき売れる見込みのある、最低価格である」(The Wealth of Nations, pp. 57-58. 前掲訳書、一四四頁、傍点は引用者)。

このようにスミスは、「資本の立場」ないし資本家的費用の観点から、「商人」||資本家は「自分が財貨を調製し、市場へもたらすあいだ」「自分自身にもその生活資料を前払いする」のだとして、利潤が「費用価格」にはいることの正当性を力説するのだが、しかし彼は地代については、その費用性を正当化しようとは試みないのであって、この点は非常に特徴的である。といっても、彼が第一の「自然価格」概念を説いたさいには、彼は、地代も賃金や利潤と同じ資格で「費用価格」||「自然価格」にはいるとしたのであったが。それはともかく、右の引用文の第二パラグラ

フでスマミスが、「かなりの長期間ひきつづき売れる見込みのある最低価格 (the lowest price)」のうち、に地代を含めていないことは明白であろう。

ところで、第一篇第七章においてスマミスはまた、「独占者たち〔個人か商社会社かのいずれか〕は、市場を恒常的に供給不足にしておくことよって、つまり有効需要をけつして余すところなく充足させないことよって、自分たちの諸商品を自然価格よりずっと高く売り、それが賃金であるうと、利潤であるうと、地代には言及されていない点に注意!」、自分たちの利得をそれらの自然率以上に甚だしく引き上げる」として、ひきつづき次のようにいつている。

——「独占価格はあらゆる場合に獲得しうる最高価格である。これに反し、自然価格または自由競争価格 (the price of free competition) は、あらゆる場合に買い手からしほりとることでできる最高価格、すなわち買い手がそれを与えることを承諾すると想定される最高価格であり、後者は、売り手がふつう取得しうると同時に、その事業をつづけうる最低価格である」(Ibid., p. 63. 同上、一五二—一五三頁、傍点は引用者)。

見られるようにアダム・スマミスは、「独占価格」を「あらゆる場合に買い手からしほりとることでできる最高価格」と見なし、かつ、「自然価格」||「自由競争価格」を「かなりの長期間にわたつて取得しうる最低価格」、あるいは「売り手がふつう取得しうる」と同時に、その事業をつづけうる最低価格」と規定するのであるが、スマミスが「自然価格」をこのように規定する場合には、彼は継続的再生産をもつばら「資本の立場」から問題にしており、だからまた、ここでも「最低価格」||「自然価格」から地代が除外されているといつてよからう。

こう見てくると、A・スマシスの「自然価格」概念はすでに第七章そのものにおいて二重であった、ということになる。すなわち、 \wedge 平均賃金+平均利潤+平均地代 \vee を意味する本来の「自然価格」と、 \wedge 平均賃金+平均利潤 \vee を意味する「最低価格」||「自然価格」と。そして、この「最低価格」——それは「売り手がふつう取得しうる」と同時に、その事業をつづけうる最低価格」だとされる——が、第十一章での「十分な価格」と同じ系譜に属する概念であることは明らかであろう。ただし、この場合、われわれは、第七章における「最低価格」にはかの「第四の部分」が含まれていない(なぜなら、同章では構成価値説および本来の「自然価格」概念が支配的であるから)のたいし、第十一章での「十分な価格」はそれを包含している(ただし、スマミスはそれをしばしば忘れるのだが)という点を見

逃してはならない。

なおマルクスは、「資本の立場」あるいは、資本家的費用視点からは、「十分な価格」＝「費用価格」に平均利潤がはいらざるをえない事情を説明しながら、次のように述べている。

「利潤は商品の生産費のなかにはいる。それはA・スミスによって正当に商品の『自然価格』のなかに要素として算入されている。というのは、資本主義的生産の基礎のうえでは、商品は、それが前貸の価値・プラス・平均利潤に等しい費用価格を生まないならば、——結局、平均的には——市場へはもたらされないからである。いいかえれば、マルサスがいうとおり、利潤は、したがってまたそれを含んでいる費用価格は、商品供給(資本主義的生産の基礎のうえでの)の一条件だからである。とはいえマルサスは利潤の源泉を、その真実の原因を理解してはいないのであるが」(Theorien, Teil III, MEW, Bd. 26, Teil III, SS. 78-79. 『学説史』第三分冊『全集』⑧Ⅲ、一〇一一—一〇二頁、傍点はマルクス)。

ところで、第十一章においては概していえば労働時間による価値規定が放棄されて支配労働説が優勢になって(注)いるので、A・スミスがその「十分な価格」概念(といっても、前述のようにスミス自身はこれをカテゴリーとして使っているのではないが)を提示するさいにも、彼は、もちろん構成価値説の見地から脱却しているわけではない。だから彼は、たとえば前掲△引用LⅤでも、賃金や利潤の「自然率」をたんに所与のものとして前提しながら、「賃金や利潤の高低は価格の高低の原因である」といつている。しかしスミスが、土地生産物について「通常価格」と「十分な価格」とを区別しつつ、地代は「通常価格」が「十分な価格」を越えた剰余分だと説く場合には、彼は前記の事情、すなわち「資本にとつて、十分な価格はその性質上、地代を排除するという事情の正しい理解のうえで、なお、「ブルジョア社会のいっさいを支配する経済力」としての資本も現実世界では土地所有の抵抗に出くわすことを察知しているのである。マルクスはこの点を評価して、「スミスは……若干の土地生産物につ

いては、その十分な価格よりも高い価格を要求するほどの前後撞着に陥っている。しかし、この前後撞着は、それ自身がまたより正しい『観察』の結果でもある」(Theorien, Teil II, MEW, Bd. 26, Teil II, S. 353. 『等説史』第二分冊、『全集』②Ⅱ、四六七頁、傍点はマルクス、ゴシックは引用者)といっている。

(注) この点を示す文章は第十一章の随所に見られるのだが、ここではさしあたり次の二つの文章を引用しておく。

「改良の進歩における長い期間をつうじて、これらのもの〔家畜や家禽など〕の量はたえず減少するが、同時にこれらのものにはたいする需要はたえず増加する。それゆえ、これらのものの実質価値、つまりこれらのものが購買または支配するであろう労働の実際の量は、次第に上昇し、ついにそれは、これらのものを、人間の勤労がもっとも多産的でもっともよく耕作された土地で生産しうる他のあらゆるものと同じように有利な生産物にする」(The Wealth of Nations, p. 219, 前掲訳書、三九一—三九二頁、傍点は引用者)。

「穀物や、人間の勤労だけによって栽培される他の野菜類を別にすれば、他のすべての種類の粗生産物、つまりすべての種類の家畜や家禽や猟鳥獣、地中から出る有用な化石類や鉱物類などが、社会の富や改良の進歩につれて自然に高価になるということは、私がすでに明らかにしようと努力したところである。したがって、たとえこのような商品が従来よりも多量の銀と交換されるようになったからといって、そのことから、銀は実質的に安価になった、つまり以前よりも少量の労働しか購買しないであろう、という結果にはならず、このような商品は実質的に高価になった、つまり以前よりも多量の労働を購買するであろう、という結果になるであろう」(Ibid., p. 216, 同上、三八八頁、傍点は引用者)。

これらの文章でスマイスが、商品の「実質価値」をその商品が支配し購買しうる労働量によって規定していることは一目瞭然である。

もっとも、スマイスは第十一章においても、ところどころで価値の正しい規定に立ち帰るのであって、たとえば彼が次のように述べる場合はそうである。

「人口が増加し、土地と労働の年々の生産物がますます大きくなるにつれて、魚類の買い手は多くなるばかりでな
アダム・スマイスの自然価格論について(中) (岡崎)

く、これらの買い手はまた、それで魚類を買うために、より多量で多様な他の財貨を、またはこれと同じことであるが、より多量で多様な他の財貨の価格をもっている。けれども、この大きくて拡大された市場を充足することは、狭くて局限された市場を充足するのに必要だった労働よりも大きな割合の労働を使用することなしには、総じて不可能であろう。わずか一千トンの魚類しか必要としなかったある市場が、年々一万トンの魚類を必要とするようになったとすれば、この市場は、以前それを充足するのに十分だったものの十倍量以上の労働を使用することなしには、めったに充足されえないであろう。魚類は総じて以前よりもっと遠距離のところを求められなければならないし、もっと大きな船舶が使用されねばならず、またもっと経費のかかるあらゆる種類の機械が使用されねばならない。それゆえ、その商品の実質価格は、改良の進歩につれて自然に上昇するのである」（*Ibid.*, pp. 234-235. 同上、四一三—四一四頁）。

スミスがこのようにいうとき、彼が労働時間による価値規定を固持していることは、明白なところであろう。

ここでわれわれは次の点を想起すべきである。すなわち、第十一章の冒頭部分で A・スミスが、「地主は未改良の土地にたいしてさえ地代を要求する」こと、そして「彼〔地主〕は、ときによっては人間が全然改良できぬものにたいしても地代を要求する」ことなどを指摘しながら、「土地の使用にたいして支払われる価格と見なされる土地の地代〔「本来の地代」〕は、当然、一個の独占価格である」と述べていた点が、それである。以前に見ておいたように、スミスは第七章では、地代が独占価格から生ずるのは「とくに地味や位置に幸いされたフランスのある葡萄園」のような特別なケースに限られるとしていたのだから、彼が第十一章にいたって右のように主張するのは、自説の変更あるいは自家撞着というほかはなからう。しかし、スミスがこのように、地代〔「本来の地代」〕は総じて、「一個の独占価格」だとするさいには、彼は——自説の展開において前後撞着しながらも——、土地所有の独占が土地生産物の価格形成に一定の干渉作用をおよぼすこと、したがって、土地生産物の価格規定と非土地生産物のそれとのあいだには相違が生じざるをえないことを感知しているのである。そしてそのかぎり

で、この場合、スマスは少なくとも地代にかんしては、かの「三位一体的定式」——ここでは地代は自然的生産要因としての土地そのものから生ずるとされる——から自己を解放しているといつてよからう。

以上、われわれは第十一章「土地の地代について」の序論的部分の内容を立ち入って検討してきたが、スマスはこの序論的部分の末尾で次のようにいう。「本章では、第一に、つねに多少とも地代を生ずる土地生産物の部分についての考察と、第二に、あるときには地代を生じ、あるときにはそれを生じない土地生産物の部分についての考察と、第三に、これらの異なる二種の粗生産物を、たがいに比較したり、製造品と比較したりする場合、改良の時代が違うのに応じて当然生ずるこれらの粗生産物の相対的価値の変動についての考察とが個別的になされる……」(Ibid., p. 147, 同上、二八二頁)。

こうしてアダム・スマスは、第十一章を三つの節に区分して極めて詳細な地代論を展開する。しかし、もともと本稿はスマス地代論それ自身の吟味をテーマとするものではないので、以下では、スマス自然価格論の検討というわれわれの主題に即して彼の所説を——同章第一・二節を中心に——見てゆくことにしよう。